

梅野木前1遺跡 発掘調査報告書

— FM山形鳩店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2007

株式会社しまむら
山形市教育委員会

うめ の き まえ
梅野木前1遺跡
発掘調査報告書

— FM山形鷲店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

平成19年7月

株式会社しまむら
山形市教育委員会

序

本報告書は、平成18年度に実施した「梅野木前1遺跡」の緊急発掘調査成果をまとめたものです。この遺跡は平成3年度に新たに確認されました。

遺跡の所在する山形市島地区は、良好な水田地帯の広がる地域でしたが、現在は山形市島地区画整理組合により、大規模土地区画整理事業が進められております。区画整理事業地内には、本遺跡の他、梅野木前2遺跡・河原田遺跡・今塙遺跡・史跡「鳩遺跡」など多くの遺跡が所在しており、今回の調査は、梅野木前1遺跡範囲内における大型店舗建設工事に先立ち実施されたものです。

発掘調査の結果、奈良～平安時代の堅穴住居跡や掘立柱建物跡などの遺構が検出されました。さらに「木簡」や「墨書き土器」など当時の生活を鮮やかに伝える、貴重な文字資料などの遺物を得ることができました。

現在山形市内には名勝史跡「山寺」・史跡「山形城跡」をはじめ、約380箇所の遺跡が確認されております。近年は市内において様々な開発事業が進められており、埋蔵文化財保護を目的とする調整の結果、発掘調査に至る事例が増加しています。

本市教育委員会では、今後とも、開発事業との調整を図りながら埋蔵文化財の保護を一層進めてまいります。

本書が山形市における埋蔵文化財の保護啓蒙のために、また市民の皆様の地域史への理解を深める一助としてご活用いただければ、誠に幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり埋蔵文化財の保護に特段のご理解とご協力をいただきました地元の方々をはじめ、株式会社しまむら、山形市島地区土地区画整理組合、発掘調査に携わった作業員の皆様並びに関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成19年7月

山形市教育委員会
教育長 大場 登

例　　言

- 1 本書はF M山形鳩店新築工事に係る「梅野木前1遺跡」平成18年度発掘調査の報告書である。
- 2 緊急発掘調査は株式会社 しまむらの依頼をうけ、山形市教育委員会社会教育課が担当した。
- 3 調査要項は下記の通りである。

遺　跡　名 梅野木前1遺跡（うめのきまえいちらいせき）

遺　跡　番　号 平成3年度登録

所　在　地 山形県山形市梅野木前地内

現　地　調　査 平成18年10月26日～平成18年12月28日

整　理　作　業 平成19年1月10日～7月31日

調　査　主　体 株式会社 しまむら

調査実施機関 山形市教育委員会

(調査体制)

平成18年度	社会教育課	平成19年度	社会教育課
課　　長	伊藤 邦男	課　　長	齋藤 哲
課　長　補　佐	富木 慶太郎	課　長　補　佐	富木 慶太郎
文化財保護係長	小野 徹	主　　任	須藤 英之
主　　任	齋藤 仁	主　　任	國井 修
主　　任	須藤 英之	臨　時　職　員	安達 未奈
主　　事	國井 修		
臨　時　職　員	樋口 有美		
臨　時　職　員	安達 未奈		

- 4 発掘調査から本書の作成にいたるまで、以下の方々及び機関からご教示・ご協力を頂いた。ここに記して感謝申し上げる。
(財) 山形県埋蔵文化財センター 塙土地区画整理組合
伊藤邦弘 伊藤武士 小野忍 堀内恒次郎 北野博司 澤谷敬 島田祐悦 島原弘征 高桑登
高橋拓 高橋学 長瀬えみ子 福島正和 古川一明 三上喜孝 荒木志伸 八重樋忠郎
山口博之 吉田歎
- 5 本書の執筆は、須藤英之が担当した。編集は須藤が担当し、安達未奈がこれを補佐した。出土した木簡（2）の同定及び訛認については山形大学人文学部准教授 三上 喜孝氏に玉稿を頂き、附章として掲載した。
- 6 発掘調査及び整理作業にあたり、以下の方々からご協力頂いた。記して感謝申し上げる（敬称略）。
石垣勝幸 伊藤桂子 大貫文義 小川定雄 栗原清子 栗原武夫 笹利幸 三部秋夫 志田英信
堤操 富沢啓広 長岡伸恭 深瀬美貴子（現場調査）
芦名久子 伊藤桂子 深瀬美貴子（出土遺物整理）
- 7 出土遺物・調査記録類・調査に係る資料は、山形市教育委員会社会教育課が一括保管している。

凡　例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は以下の通りである。

S B…掘立柱建物跡 S I…堅穴住居跡 S D…溝跡 S K…土坑 S P…柱穴・ビット
S G…自然河川 S X…性格不明遺構 S …縫 P…土器 W…木・柱根

- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号を報告書においても踏襲した。

- 3 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は全て真北を示す。高さは海拔高で記載した。

遺構平面図に付した座標値は、平面直角座標系第X系（世界測地系）に換算。単位はmである。

- 4 調査区グリッドの南北軸は任意の設定としたため、南北軸線方向はN-21°-Eを図る。

- 5 基準杭の設定並びに空中写真撮影及び図化は株式会社バスコに委託した。

- 6 遺構実測図は原則として1/40の縮図で採録し、各々スケールを付した。

- 7 遺物実測図・拓影図は、全て1/3の縮図で採録し、各々スケールを付した。

- 8 遺構実測図中の水系レベルは標高を表す。単位はmである。

- 9 土層観察においては、各調査区の基本層序についてはローマ数字を、各遺構覆土の層位についてはアラビア数字で表した。

- 10 遺物実測図の内、断面黒ベタは須恵器を示し、断面黒60%は赤焼土器を示す。

その他の遺物は断面白抜きとした。アミ伏せの範囲は内面黒色処理もしくはスス付着範囲を示す。

- 11 遺構実測図中、アミ伏せ箇所は焼土範囲を示す。

- 12 遺構観察表中において、単位はcmを使用している。

- 13 遺物観察表中において、()内数値は図上復元による推計値を、-は計測不能を示す。単位はcmを使用している。

- 14 遺構・遺物番号は本文・表・挿図・写真図版とも一致させている。

- 15 基本層序及び遺構覆土の色調記載については、『新版標準土色帳』（小山・竹原：1997）に依った。

- 16 本書で使用した地形図等は以下の通りである。

第1図 山形市発行1:2,500国土基本図 X-QC 38-4 (山形広域都市計画図「江俣」)を1:2,000に拡大。

第2図 山形県1982『土地基本分類調査 山形』「地形分類図」を基に作成。

第3図 国土地理院発行1:25,000『山形北部』

第4図 大日本帝國陸地測量部発行1:25,000地形図『山形北部』

第5図 山形市1956『山形市三千分一都市計画図其一』を1:10,000に縮小。

- 17 遺物注記は、過年度調査区との混同を避けるため「2006ウメノキマエ1」と標記し、(グリッド)(遺構番号)(層位)(取上時遺物番号)(掲載番号)の順に併記した。

目 次

I 調査の経緯・	1	1 遺跡の層序・	8
1 調査に至る経過・	1	2 遺構と遺物の分布・	8
2 調査の方法と経緯・	1	3 検出された遺構と遺物・	14
II 遺跡の立地と環境・	3	IV 考察・	64
1 地理的環境・	3	参考文献・	66
2 歴史的環境・	3	附章 山形市梅野木前1遺跡出土木簡・	69
III 検出した遺構と遺物・	8	報告書抄録・	70

表

表1 梅野木前1遺跡土層注記・	57	表3 梅野木前1遺跡出土遺物観察表・	61
表2 梅野木前1遺跡柱穴觀察表・	60		

挿 図

第1図 調査区概要図・	2	第23図 G~7グリッド遺構群 平面図・断面図・	33
第2図 地形分類図・	4	第24図 SP116・SD96・SP94・S081 出土遺物・	34
第3図 遺跡位置図・	5	第25図 D~13~14グリッド遺構群 平面図・断面図・	
第4図 昭和9年遺跡位置図・	6	出土遺物・	35
第5図 昭和31年段階の遺跡位置図・	7	第26図 H~I~9ピット群平面図・断面図・	36
第6図 基本層序セクション配置図・	9	第27図 H~10ピット群平面図・断面図・	37
第7図 南北軸基本層序・	10	第28図 遺構出土柱根・	38
第8図 東西軸基本層序・	11	第29図 F~G~16グリッド遺構群 平面図・断面図・	39
第9図 各調査区南北軸基本層序・	12	第30図 I~22~25グリッド 平面図・断面図・	40
第10図 E~18~21・G~18~21基本層序・	13	第31図 SD 1・SD125・SP 2・SP 3・SP 4 平面図・断面図・	41~42
第11図 遺構配置図・	15~16	第32図 SD 1・SD125・SP108 出土遺物・	43
第12図 S137 平面図・断面図・	18	第33図 SK38・SD36・SD39 平面図・断面図・	44
第13図 S137 出土遺物・	19	第34図 SG41 平面図・断面図・	45~46
第14図 S180 平面図・断面図・出土遺物・	20	第35図 SG41 出土遺物(1) ······	47
第15図 S1168 平面図・断面図・	21	第36図 SG41 出土遺物(2) ······	48
第16図 S1168 出土遺物・	22	第37図 VI層・Vb層・Vc層・IV層・II層 出土···	50
第17図 SB169・SB170 平面図···	23~24	第38図 V層 出土遺物(1) ······	51
第18図 SB169・SB170 ピット群断面図・出土遺物···	25	第39図 V層 出土遺物(2) ······	52
第19図 I~18~20グリッド遺構群 平面図···	27~28	第40図 V層 出土遺物(3) ······	53
第20図 I~18~20グリッド 各遺構断面図···	29	第41図 V層 出土遺物(4) ······	54
第21図 I~18~20グリッド 各遺構出土遺物···	30	第42図 V層 出土遺物(5) ······	55
第22図 I~18~20グリッド 各遺構出土遺物(2)···	31	第43図 V層 出土遺物(6) ······	56

図 版

図版1 調査区遺景 / I~19出土平瓶	他	図版17 SD145・SD113セクション 他	
図版2 調査区全体 / SB169・S B 170 倒歛		図版18 SP127セクション 他	
図版3 SB171付近斬跡 他		図版19 I~12~14グリッド西壁セクション 他	
図版4 S137精査状況 他		図版20 出土遺物(1)	
図版5 S180セクション/S180完掘状況		図版21 出土遺物(2)	
図版6 I~17グリッドV層精査後状況 他		図版22 出土遺物(3)	
図版7 G~6~8グリッド遺構検出状況		図版23 出土遺物(4)	
図版8 SP 8セクション 他		図版24 出土遺物(5)	
図版9 SP12セクション 他		図版25 出土遺物(6)	
図版10 SP21セクション 他		図版26 出土遺物(7)	
図版11 SP34・SD35・SD16セクション 他		図版27 出土遺物(8)	
図版12 SP28セクション 他		図版28 出土遺物(9)	
図版13 SP17断ち割り 他		図版29 出土遺物(10)	
図版14 I~13~15グリッド様出状況		図版30 出土遺物(11)	
図版15 SP 4セクション 他		図版31 出土遺物(12)	
図版16 I~J~18グリッド北壁基本層序 他		図版32 出土遺物(13)	

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

梅野木前1遺跡は山形市北西部の梅野木前地区に所在する。平成3年度に、島地区及び今塚地区において、市街化区域編入と区画整理事業による宅地開発が計画されたことを受け、山形県教育委員会で実施した表面踏査により、奈良～平安時代の遺跡として新規登録がなされた（山形県教育委員会 1992）。

山形市教育委員会では土地区画整理事業の進展に先立ち、平成15年度に梅野木前1遺跡範囲東側について試掘・確認調査を実施した結果、遺構・遺物の分布がさらに東に伸びることが分かり、遺跡範囲の変更を県教育委員会に報告している。ただし、従来の遺跡範囲より東に伸びる部分については、古墳時代の文化層は確認されず、奈良・平安時代の時期の集落のみ広がるものと考えられた。

平成17年度、山形市による市道嶋西通り線道路改良事業の実施に際し、山形市教育委員会では、当該事業実施の範囲内において緊急発掘調査を行った。本次調査区の西側隣接部分にある。

本次調査の事業区域においては、当初は本調査の対象とならない施工内容で事業を実施する様、事業者との間で調整を図っていた。確認のため平成18年8月31日～9月2日に、事業者側借上の重機による立会調査を実施したところ、いずれの基礎掘削予定箇所でも工事掘削深度が遺跡の文化層に到達し、遺跡保護層が確保されないことが確認された。そのため急速担当者間で協議を行い、本調査実施の方向で調整が行われた。平成18年10月26日付で株式会社しまむらと山形市教育委員会の間で協定を締結し、発掘調査の実施を合意した。

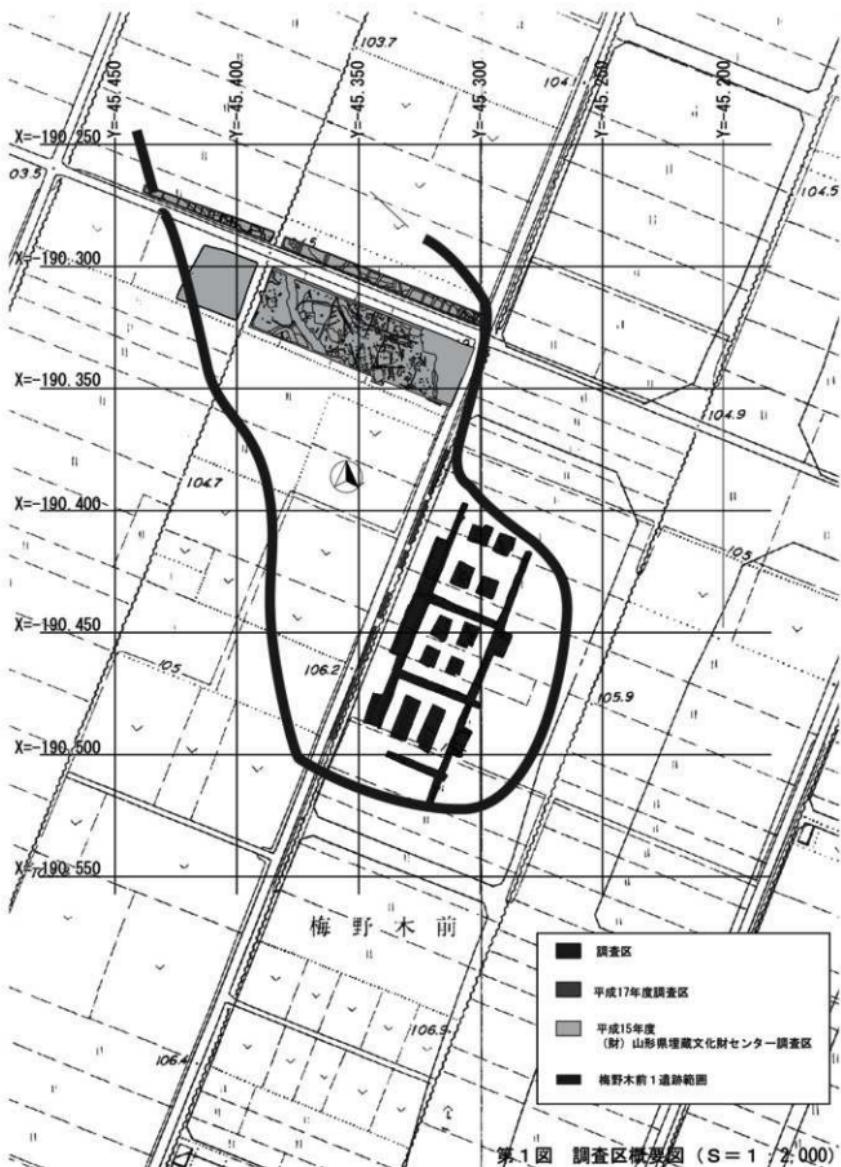
発掘調査は、株式会社しまむらの依頼により、当市教育委員会が実施したものである。調査の期間は平成18年10月26日から12月28日の延べ44日間の期間で実施した。

2 調査の方法と経過

事業実施範囲についての発掘調査は、平成18年10月26日～12月28日までの延べ、44日間実施した。調査面積は約2,203 m²である。

調査区を覆う座標は、調査区の南北軸線に合わせて配置した。南北をY軸の基準とし、それと直交する線をX軸とした。これを起点として5m四方の方眼（グリッド）を設定した。Y軸は北から南に1～25まで、X軸は西から東にA～Jまで番号を設定し、「B-5」のように標記した。方眼のY軸軸線は、真北方向に対してN-21°-Wを図る。

以下、梅野木前1遺跡の平成18年度調査における現地調査工程の概略を記す。10月26日に調査区の設定、及び重機掘削による表土除去作業に入った。10月29日に休憩所・仮設トイレの設置、発掘器材搬入・環境整備を行う。11月6日から人力による遺構面精査を開始した。その後、遺構検出に並行して検出状況の写真撮影・遺構登録・精査を行った。遺構精査については、土層観察のために、各遺構の平面図や断面図の作成、遺物の検出および登録、写真撮影、土層注記などの記録作業、遺物取り上げなどを実施した。12月26日に遺構精査・測量記録を終了、同日より器材を撤収し始め、28日に現地における調査を終了した。本報告書以前に実施された平成17年度の山形市による緊急発掘調査（植松2006）、平成15～16年度に（財）山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した都市計画道天童鮎洗線敷設に伴う緊急発掘調査（伊藤2007）については既に報告書が刊行されている。



第1図 調査区概要図 (S = 1 / 2,000)

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

山形市は、山形県東部に形成される山形盆地の南東部に位置する。東側には宮城県との県境となる奥羽山脈が連なり、市域の南部と西部には白鷹丘陵が裾野を広げている。奥羽山脈に源を発する馬見ヶ崎川が市内を北流し、南東から北西に伸びる扇状地を形成し、その中に山形市街地は形成されている。その他にも、周囲の山々から流れ出す大小の河川が小規模な扇状地をつくり、複合扇状地の様相を呈している。

梅野木前1遺跡（平成3年度登録）は山形市の北西部、JR山形駅から北西4.3km、山形市大字梅野木前地内（土地区画整理事業地内24街区）に所在する。調査前の地目は水田・畠地として利用されていた。

馬見ヶ崎川によって形成された扇状地上に立地した山形市街地は、東の奥羽山脈から村山盆地南半西側を北流する須川に向かって緩やかに傾斜し低くなっている。

本遺跡は馬見ヶ崎川と須川に挟まれた低湿地内の自然堤防上に立地する。調査対象地の平均標高は約105mを測る。調査区の東側は扇状地扇端部、西側は扇状地下を伏流する小河川によって形成される沖積平野と、その間に自然堤防が絡み合うような地形様相を呈している。

2 歴史的環境

山形市内では現在約380箇所の遺跡が確認されている。近年の山形市内においては、各地域で土地区画整理事業等をはじめとする開発事業の進展に伴い、埋蔵文化財と開発行為との調整が増加している。

梅野木前1遺跡の所在する山形市江俣地区付近には、第3図のように弥生時代中期の河原田遺跡・江俣遺跡、古墳時代前期と平安時代の複合遺跡である今塚遺跡が存在する。本次調査区の北西隣接部分、(財)山形県埋蔵文化財センターによる平成16年度梅野木前1遺跡調査区からは、古墳時代前期の水田跡、古墳時代前期の堅穴住居跡を主体とする集落が確認されている。

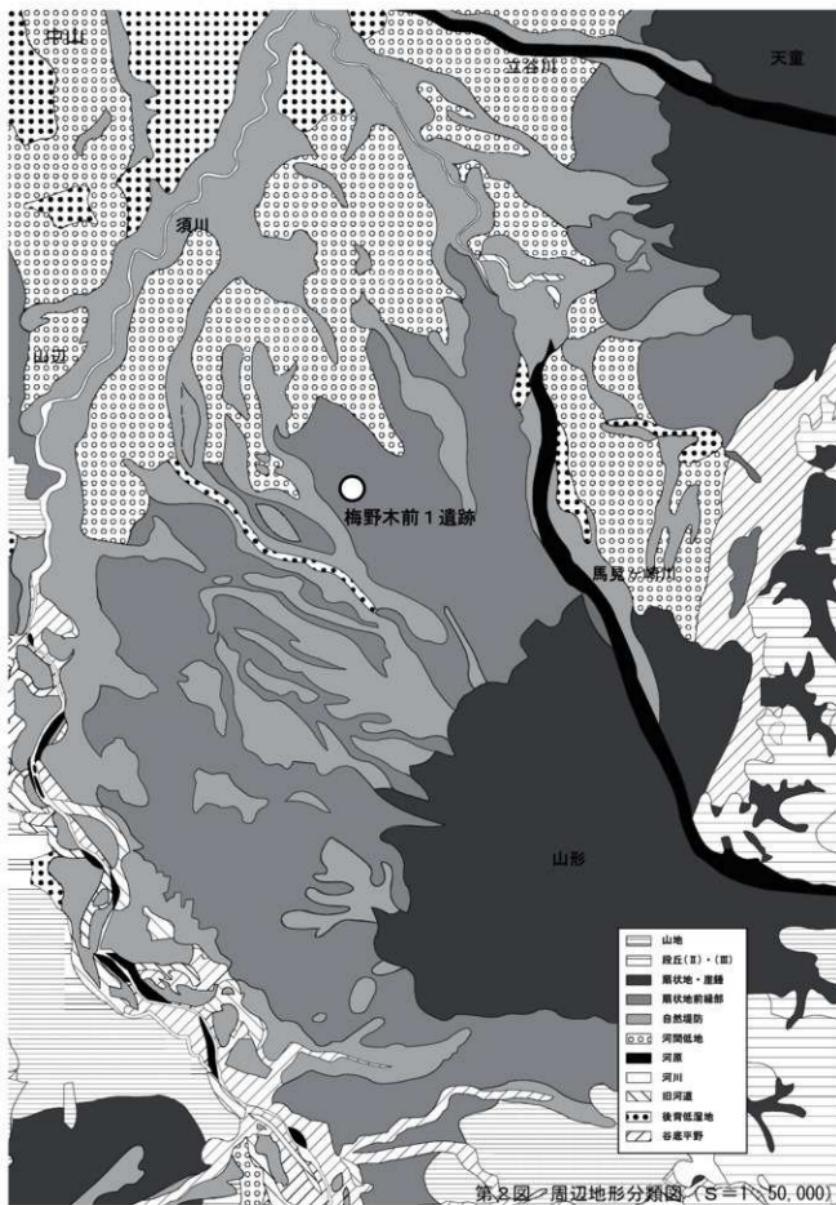
古墳時代中期では長表遺跡、後期の集落は国指定史跡島遺跡が所在する。墳丘としては志戸田地区に去手呂古墳群が所在する。

梅野木前1遺跡本次調査区の主たる時期にあたる奈良～平安時代を主体時期とする遺跡では、今塚遺跡・河原田遺跡・梅野木前2遺跡、行才遺跡などが周囲に所在する。

これらの事から、弥生時代中期頃から人々は金井・大郷地区内の自然堤防としての微高地に集落を営み、そして古墳時代・奈良～平安時代に至る時期にも当地において集落が形成され、生業活動が行われ続けたものと考えられる。現在の山形市金井地区は、古代の郡制によれば「那珂郷」に含まれていた説（角川日本地名大辞典編纂委員会1981）が提唱されていたが、平成11年度に(財)山形県埋蔵文化財センターにより発掘調査された志戸田綱遺跡から「福有南」と墨書きされた土器が出土したため、別の郷名「福有郷」案も想定されている。

この時期の集落の一端を成したのが梅野木前1遺跡であり、古代出羽国最上郡内の集落の一部であったものと推定される。山形市街地の西側、須川周辺の自然堤防には多くの奈良～平安時代遺跡が確認される。また、山形市内南端の中位段丘地に展開する山形市小松原地区や上山市久保手地区、あるいは山形市の北西に位置する寒河江市平野山窯跡群では、当時の須恵器大生産地帯であった事を物語るように、窯跡遺跡が数多く発見されている。これら生産遺跡についても近年発掘調査事例が蓄積されており、山形市内消費地遺跡との供給関係など、関連性については課題となっている。

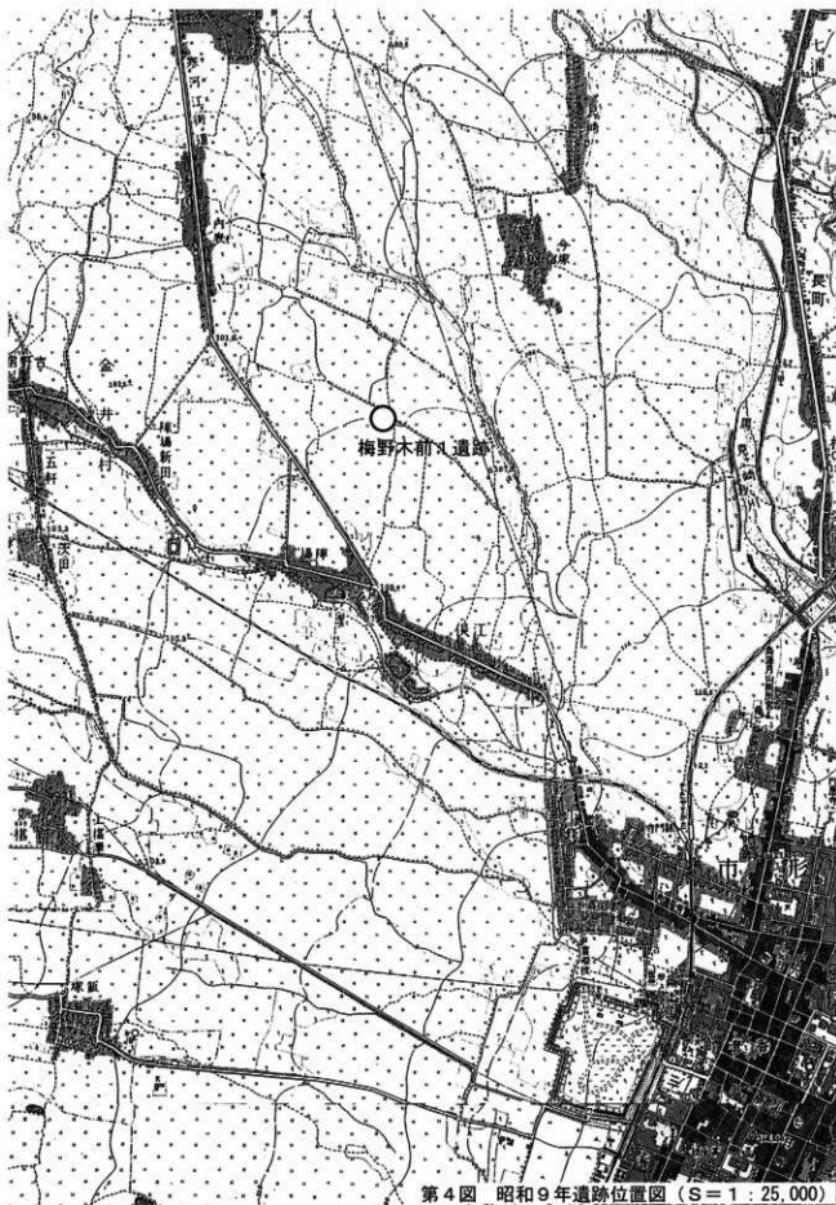
中世に至り、現在の山形市街地の範囲は「大山荘」の範囲内に推定され（山形県1982）、長表遺跡、志戸田綱遺跡などが当該期の遺跡として確認されている。この頃の集落遺跡としては志戸田綱遺跡、平地居館としては長表遺跡や今塚館などが築かれた。戦国時代に至り中野城等の平地居館と合わせ、長谷堂城・成沢城・平清水館・山家楯などの山城が山形盆地周囲の丘陵地に築かれたものと推定される。



第8図 周辺地形分類図 (S=1:50,000)



第3図 遺跡位置図



第4図 昭和9年遺跡位置図 ($S = 1 : 25,000$)

近世になると山形城が築かれ、現在の山形市街地の基礎となる都市計画が開始された。現在の震城公園にあたる山形城跡の本丸と二の丸を中心とする区域、並びに十日町一丁目地内に現存する三の丸堀跡及び土壘の残存区域については史跡として国指定を受け、現在整備が進められている。

同時期に、山形城下の耕作地帯の整備が開始されたと考えられる。現在の馬見ヶ崎川は、近世初期の寛政年間に、当時の山形城主・島居忠政による河川改修が行われ、益山付近で北に大きく流路改変が成されたと伝えられる（山形市1973）。それ以前は、現在の流路より南寄りを流れ、小白川町付近から旧県庁（重要文化財「山形県旧県庁舎（文理館）」）付近を通って西へ流れていたと推定される。

その馬見ヶ崎川の河道末端を利用して山形五堰が開発された。山形五堰は、山形市内西部に展開する農村集落の水田地帯における農業用水供給を目的として、当時の山形城主・島居忠政による寛永元（1624）年以降の馬見ヶ崎川改修事業以降、継続して整備されたものと推定される（山形市1973）。その内の一つ、八ヶ郷堰は山形市内の北西部に向かって流れ、江俣・陣場・陣場新田・鮎洗・志戸田・吉野宿・中野・船町の8地区に流れ込む事から「八ヶ郷堰」の名称が付けられた、と推定されている。陣場地区付近では、陣馬沼などのため池が、河道の名残として昭和40年代まで残存していた（金井の歴史刊行会 2005）。

その後、金井地区は山形市内における耕作地帯として開発が進められたものと推定される。馬見ヶ崎川扇状地を経由しての山形市内西側に注がれる山形五堰の一基、八ヶ郷堰を主たる水源として水田耕作が經營されてきた。

近代に至り、明治2年（1869）に廃藩置県が実施され、新制「山形県」が明治4年（1871）7月の廃藩令により置かることとなった。この後の明治22年（1889）に、新制の金井村が成立した。

近年に至り、昭和30年代以降に耕地整理事業が実施、江俣地区や馬上台地区等で土地区画整理事業が実施、現在は先述のように島田地区画整理事業が進められ、宅地及び商業用地としての開発が進められている。



III 検出された遺構と遺物

1 調査区と層序

梅野木前遺跡は南北約200m、東西約180mの範囲に広がる。地目は水田・畑となっており、標高は北端で約105m、南端で約106mを測る。馬見ヶ崎川扇状地前縁部（山形県1982）内の微高地に立地する。

調査区当該区域周辺については、昭和30年代以降、大規模な耕地整理が実施された。さらに平成17年度には、水田耕作を中止した現地表の上層に、厚さ60cmの盛り土が、嶋土地区画整理組合により施工されている。

今回の発掘調査区は、遺跡の範囲に南北に長く広がる形で、建物の基礎掘削予定箇所に合わせてトレーンチを配置する形となった（第11図）。調査区を覆うグリッドは、地形に合わせて配置し、5mを最小単位とするグリッドの設定を行った（第6図）。

基本堆積土層の観察は調査区の全体で行った。その結果、基本的な堆積は各地点において概ね同様であった。詳細は各調査区の土層セクションを参照されたい（第6～10図）。

I層は、平成17年度に嶋土地区画整理組合により実施された盛り土層である。

II層は、I層造成直前までの水田耕作土層・及び畠土である。

III層は、数年前まで耕作を実施していた水田基盤層である。

IV層は、III層以前の耕作土層である。暗褐色細砂層である。遺物が多く含まれる。

V層は、河川の堆積作用による黒色シルト層である。

Vb層は、V層下層に検出される黄褐色粘質シルト層である。未分解のヨシ等の植物質を多量に含む。

Vc層は、V層の下層に検出される灰褐色細砂層である。未分解の植物質を微量に含み、Vb層ほどの広がりではないが、I-17～21グリッド周辺にかけて5～10cm程度の厚さで堆積する状況が窺えた。

VI層は黄褐色粗砂層であり、梅野木前1遺跡の遺構確認面、奈良～平安時代の地山層として判断した。

なお、奈良～平安時代の遺構確認面下層について、部分的掘り下げを実施し、地山層のVI層以下20～60cm下に、未分解植物質を大量に含む腐植土層が確認されたが、古墳時代の文化層は検出されなかった。

2 遺構と遺物の分布

調査区では奈良～平安時代の土坑群や堅穴住居跡、溝跡や柱穴群を中心として多数の遺構・遺物が確認された。遺構と遺物の分布は調査区中央から東側に特に集中して検出されたが、全体的には近年までの水田基盤層の下層の包含層中に遺物が多く確認された。

本次調査の前年度に、西側隣接部分で市道拡幅に伴う発掘調査を実施しており、古代の遺構・遺物群が検出されている（植松2006）。また、北西隣接部分では、平成15～16年度に財團法人山形県埋蔵文化財センターによる発掘調査が実施され、奈良～平安時代の文化層のさらに下層に、古墳時代前期の水田跡及び集落跡が確認された。

本次調査区でも、下層に古墳時代の文化層の有無が懸念されたが、前述通り深掘りをした結果、確認されなかった。また、古墳時代の混入と考えられる遺物もほとんど確認されなかった。

今回の調査においては、遺物は奈良～平安時代の古代の土師器・須恵器、施釉陶器・瓦、木簡などの木製品、近代の陶磁器や木製品が確認された。遺構覆土中から検出されたものに比して、二次的な堆積による上層の包含層中に含まれるもののが大半を占める状況であった。

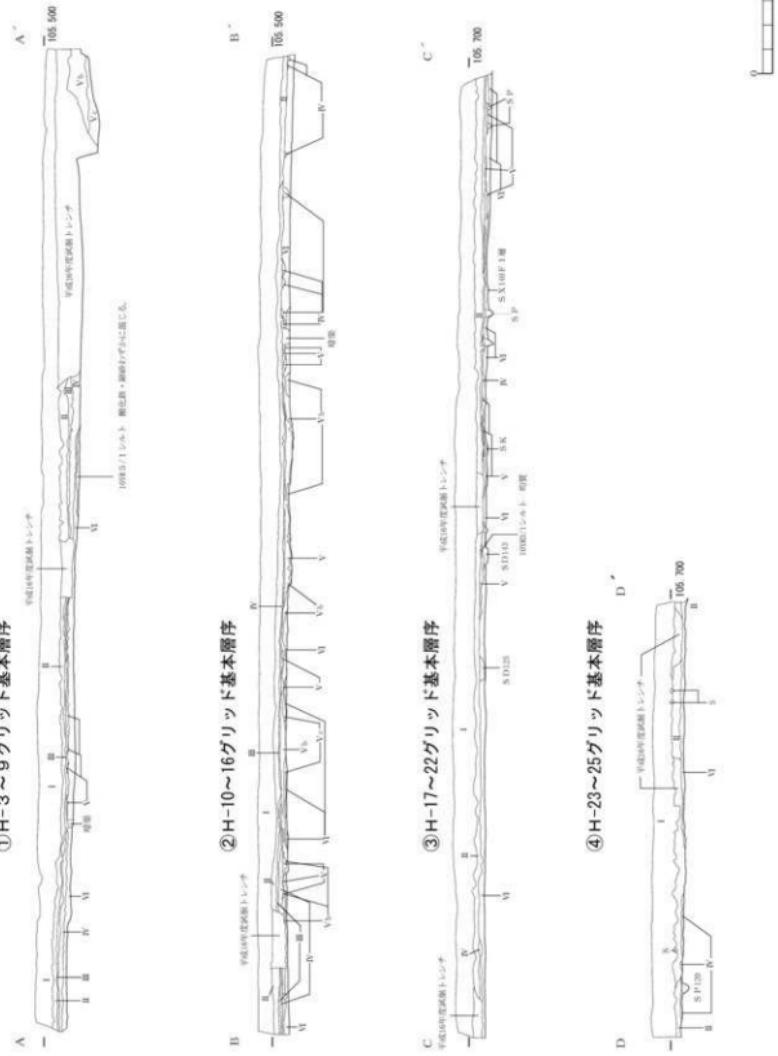
近代の地山層となるV層、あるいは遺構検出面のVI層まで重機により表土を除去した後、下層の遺物包含層及び遺構を精査した。

V層、もしくは近似するSG41覆土中からは、中世の12世紀後半まで降る時期の遺物が確認されたため、土砂堆積の下限は中世まで降るものと考えられるが、その他の稻杭痕跡等以外には新しい時期の遺物は確認されず、V層以下の検出遺構については奈良～平安時代の範疇に収まるものと判断される。



第6図 基本層序セクション配置図

第7図 南北軸基本層序



第8図 東西軸基本層序

0 4m (1:100)



平成14年度地質調査トピック



平成14年度地質調査トピック



平成14年度地質調査トピック

⑧ E-2～4グリッド基本層序



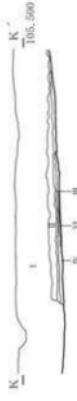
⑨ H-2～4グリッド基本層序



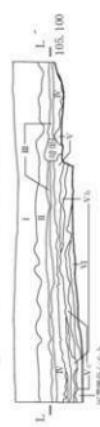
⑩ E-6～8グリッド基本層序



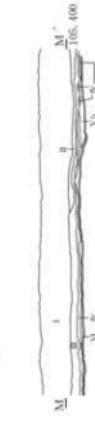
⑪ G-6～8グリッド基本層序



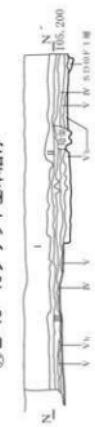
⑫ E-10～12グリッド基本層序



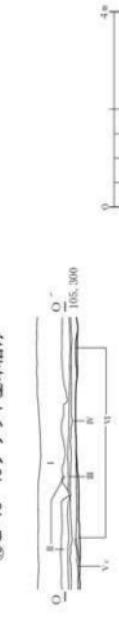
⑬ G-10～12グリッド基本層序



⑭ E-13～15グリッド基本層序



⑮ G-13～15グリッド基本層序



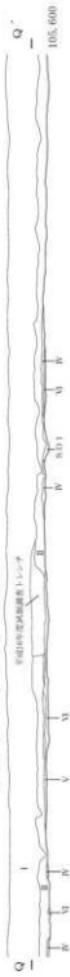
第9図 各調査区南北軸基本層序

第10図 E-18~21・G-18~21グリッド基本層序

(⑩) E-18~21グリッド基本層序



(⑪) G-18~21グリッド基本層序



3 検出された遺構と遺物

1. 壓穴住居跡

S I 37 (第12図: 図版4)

F-10グリッドに所在。規模は東西軸3m、検出面からの深さは20cmである。北半分は調査区外のため、未検出である。南北軸線はN-7°-Wを測る。SD 82を切る。覆土は5層に分類された。平面の検出プランは不整の方形を成し、堅穴住居跡と推定されるが、カマドは確認されなかった。

須恵器壺(1)、木簡(2)、木簡状木製品(3)、磨石状石製品(4)、被熱縫(5~7)が出土している。木簡(2)の内容については附章の山形大学准教授 三上喜孝先生による解説を参照頂きたい。

(1)の形状から推定して、9世紀前半の年代が推定される。

S I 80 (第14図: 図版5)

E-F-9グリッドに所在。規模は東西軸2.5m、検出面からの深さは20cmである。北半分は調査区外のため、未検出である。南北軸線はN-1°-Eを測る。遺構の切り合いで重複関係は確認されなかった。覆土は1層であった。平面の検出プランは不整の方形を成し、堅穴住居跡と推定されるが、カマドは確認されなかった。

墨書痕跡のある須恵器壺底部(8)、須恵器壺破片(9~12)が出土している。9は内面に火を受けた痕跡が確認され、11・12は外面に擦痕が確認される。S I 37と形状・堆積状況共に酷似する。出土遺物の須恵器壺から、9世紀前半の年代が推定される。

S I 168 (S X 139・S X 140) (第15図: 図版6)

F-10グリッドに所在。規模は推定で南北5.5m、S X 139の検出面からの深さは16cmである。推定される建物の軸線は、N-3°-Eを測る。断面観察では、S X 139をS X 140が切る層序関係にある。当初はS X 139・S X 140について、覆土中に多量の炭化物及び焼土が確認され、性格不明遺構として精査を行った。住居跡全体の形状及び範囲は推定になるが、S I 168の床面として整地された遺構のS X 139及びS X 140と想定した。S X 139から須恵器蓋(13・14)・壺(15・16)・甕(17)・土師器壺(19~23)・小型甕(24~25)、S X 140から土師器小型甕(26)が出土した。

S X 139は覆土中に炭化物や焼土を10%含み、しまりは硬い。覆土は1層に分類された。S X 140は覆土中に炭化物を60%含み、しまりは弱い。覆土は1層に分類された。カマドは確認されなかったが、S X 139・S X 140出土土師器壺には外面に煤が付着しているものが多く確認された。

S X 139範囲を切るSD 112がS I 168の構成要素となるか、伴わずに後で掘削された溝となるかは不明である。東西両端は調査区の外になるため建物の全体の規模は確認できなかった。

2. 堀立柱建物跡

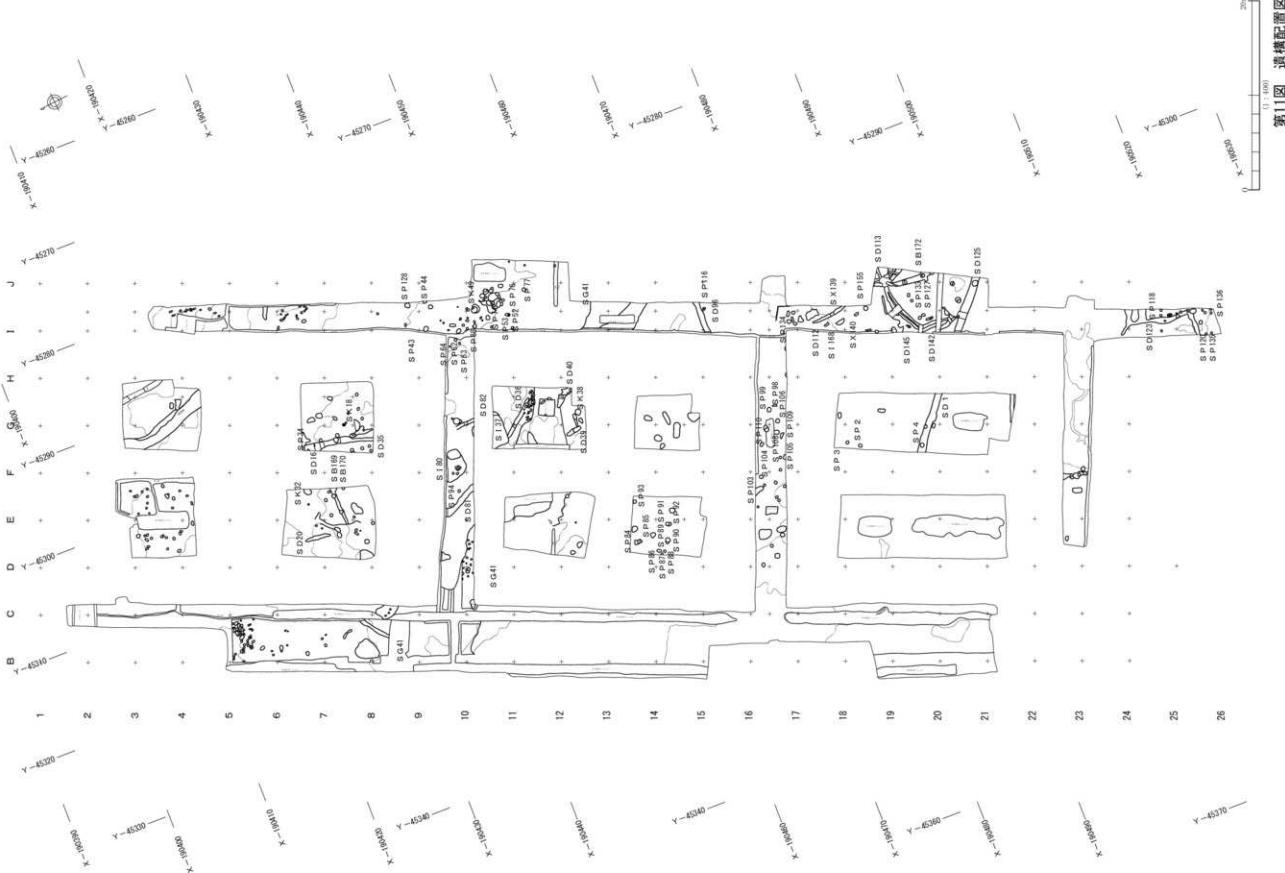
S B 169 (第17~18図: 図版2・7~10)

D-F-7グリッドに所在。S P 21・S P 22・S P 23・S P 164・S P 11・S P 10・S P 9・S P 5・S P 25・S P 24により構成される。桁行の推定長は約40mを、南北軸線方向はN-2°-Eを測る。いずれの柱穴からも、土師器や須恵器の小破片のみが検出された。図化していない。北東角に位置するS P 164はSD 16精査後に確認され、そのためS B 169はSD 16より後の年代が推定される。

S B 170 (第17~18図: 図版2・7~11)

D-F-7グリッドに所在。S B 169と建物桁行の軸線方向を異にし、重なり合う様に検出された状況から判断して、建て替え等の理由による時間差があるものと考えられる。桁行は西辺を構成するピットが検出できず不明である。梁行は約23m、南北の軸線方向はN-8°-Wを測る。

S P 26・S P 27・S P 34・S P 17・S P 19・S P 9・S P 6によって構成される。断面観察からは、S D 29・S D 16・S D 35を切る層序関係が観察された。S D 35がS B 170の雨落ち溝の地業として掘られた可能性もある。



第11図 遺構配置図

一方SD 20とSD 29は一連の溝跡かと推定されるが、掘立柱建物跡の柱穴は北側には確認されず、この場合建物規模と合わなくなるため、溝跡と建物跡が伴わない可能性もある。遺物はSP 17から(27)、SP 34から(28)がそれぞれ出土した。

SB 172 (第19図: 図版10)

I-18~19グリッドに所在。SD 113・SD 115他の溝跡によって閉まれる配置となる。整理作業時に確認した規模で、南北長は20m・東西長は18mを測る。南北の軸線方向はN-2°-Wを測る。SP 138・SP 127・SP 141・SP 132・SP 132・SP 149・SK 146・SP 151により構成される。SD 126を切る。遺物はSP 127から須恵器有台杯(29)が出土している。

3. 土坑

SK 18 (第23図: 図版7)

F・G-7グリッドに所在。上端平面プラン形状は不整橢円形である。規模は東西軸1.2m、南北軸0.7mを測る。検出面からの深さは40cmである。

木製品の刀代(駒?)状の木製品(52)が出土した。SB 169またはSB 170の東側に隣接する位置関係になる。周辺遺構との切り合ひ等は確認されない。

SK 32 (第17図: 図版12)

E-6グリッドに所在。上端平面プラン形状は不整形である。規模は南北軸0.7mを測る。検出面からの深さは14cmである。遺物は土師器小片が出土したが図化していない。

SK 38 (第33図: 図版18)

G-12グリッドに所在。上端平面プラン形状は不整方形である。規模は東西軸・南北軸共に約0.6mを測る。検出面からの深さは12cmである。遺物は出土していない。

SK 49 (第27図)

I-10グリッドに所在。上端平面プラン形状は不整円形である。規模は東西・南北軸共に0.6mを測る。遺物は底部に礎板ないしは柱根と判断される木製品(58)が出土した。もともと柱根が残存していた柱穴の上層が擾乱を受けた状態で検出されたものと推定される。

SK 109 (第29図: 図版18)

F-16グリッドに所在。上端平面プラン形状は不整円形を呈し、規模は東西軸0.7mを測る。検出面からの深さは14cmである。遺物は木柱(71)・須恵器蓋(39)が出土している。

4. 柱穴

上記の掘立柱建物跡を構成するもの以外で、柱穴を構成するに至らなかつたものを表2に列挙した。

5. 溝跡

SD 82 (第12図)

F-9~G-10グリッドに所在。上幅は35cm、深さは20cmを測る。平面プランは直線であり、軸線方向はN-2°-Eを測る。SI 37に切られる。遺物は出土していない。

SD 112 (第15図)

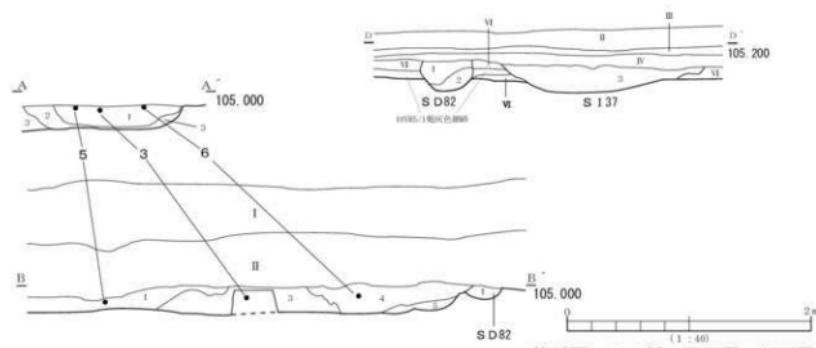
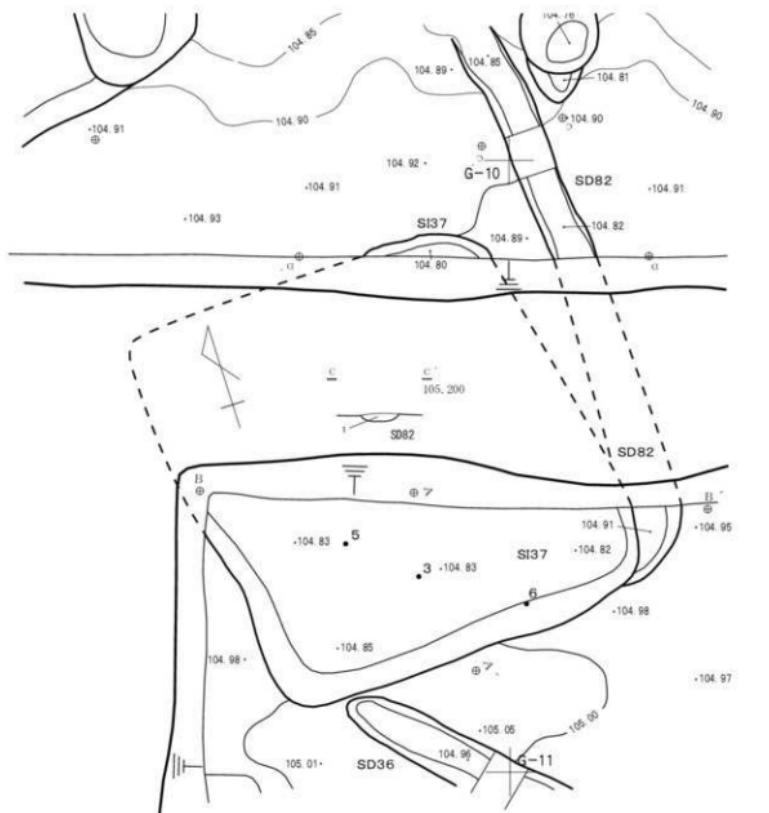
I-17グリッドに所在。平面プランは直線である。SX 139を切る。遺物は出土していない。

SD 16 (第17図: 図版9)

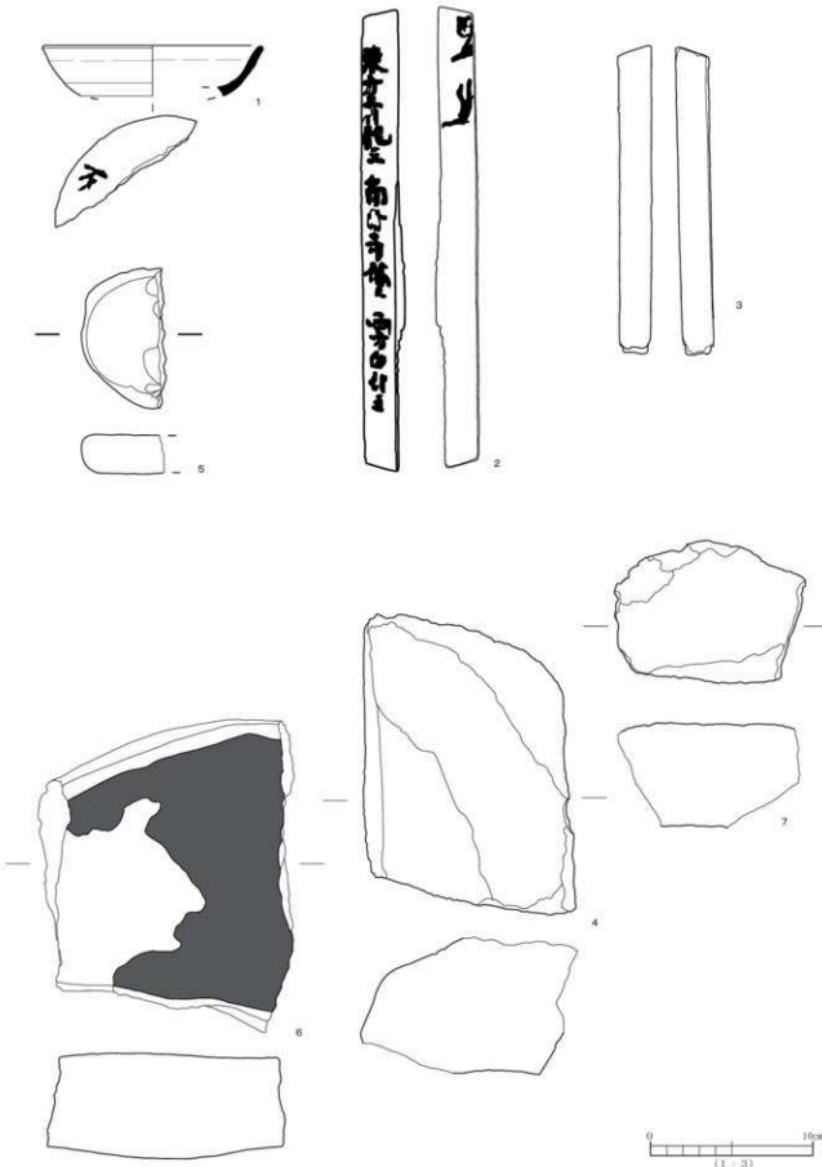
F-7グリッドに所在。平面プランは直線であり、軸線方向はN-14°-Eを測る。SD 35に切られる。遺物は出土していない。

SD 20 (第17図: 図版9)

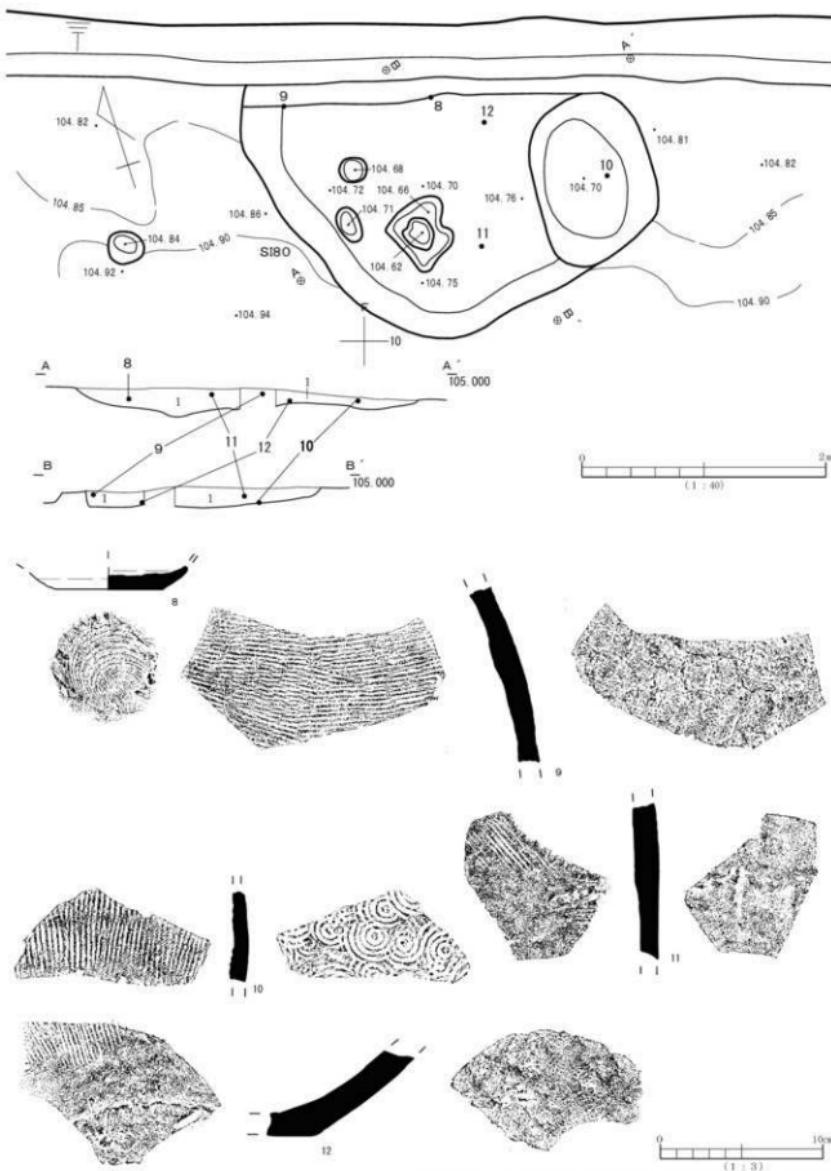
D-6グリッドに所在。平面プランは直線であり、軸線方向はN-7°-Eを測る。南側が掘削を受けており判然



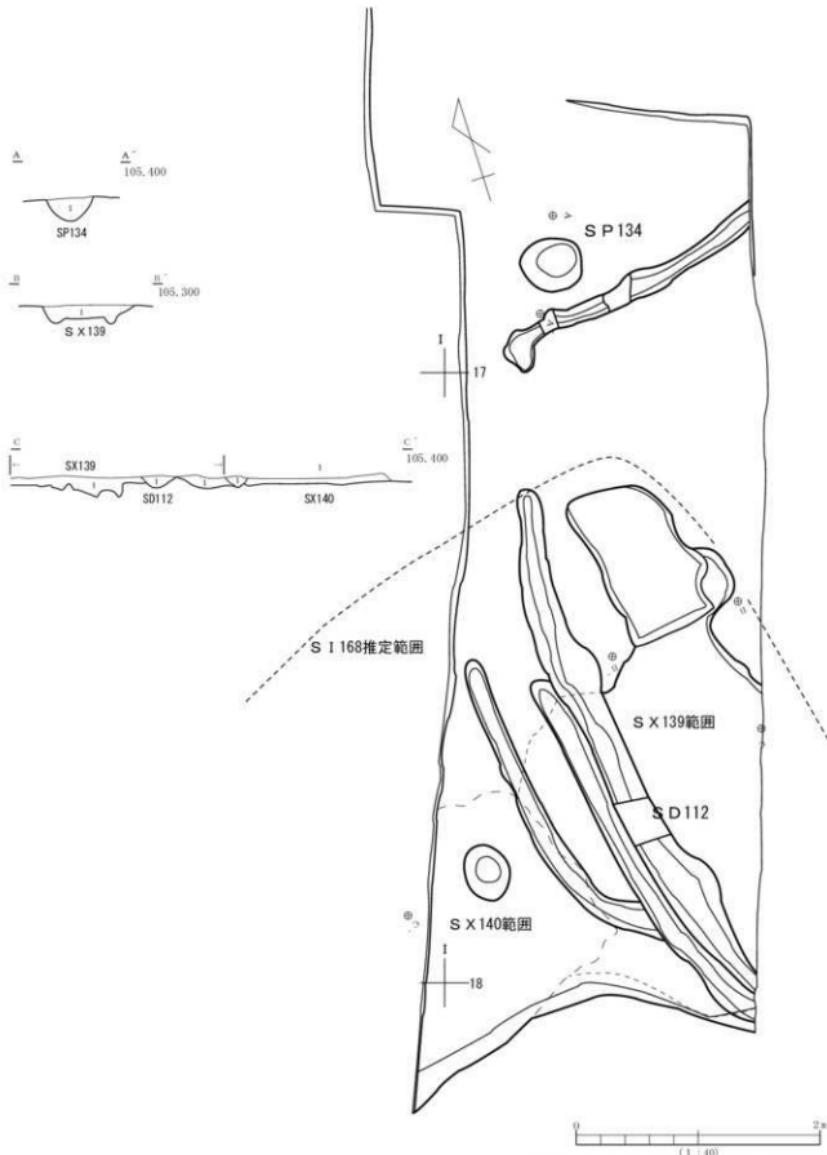
第12図 S I 37 平面図・断面図



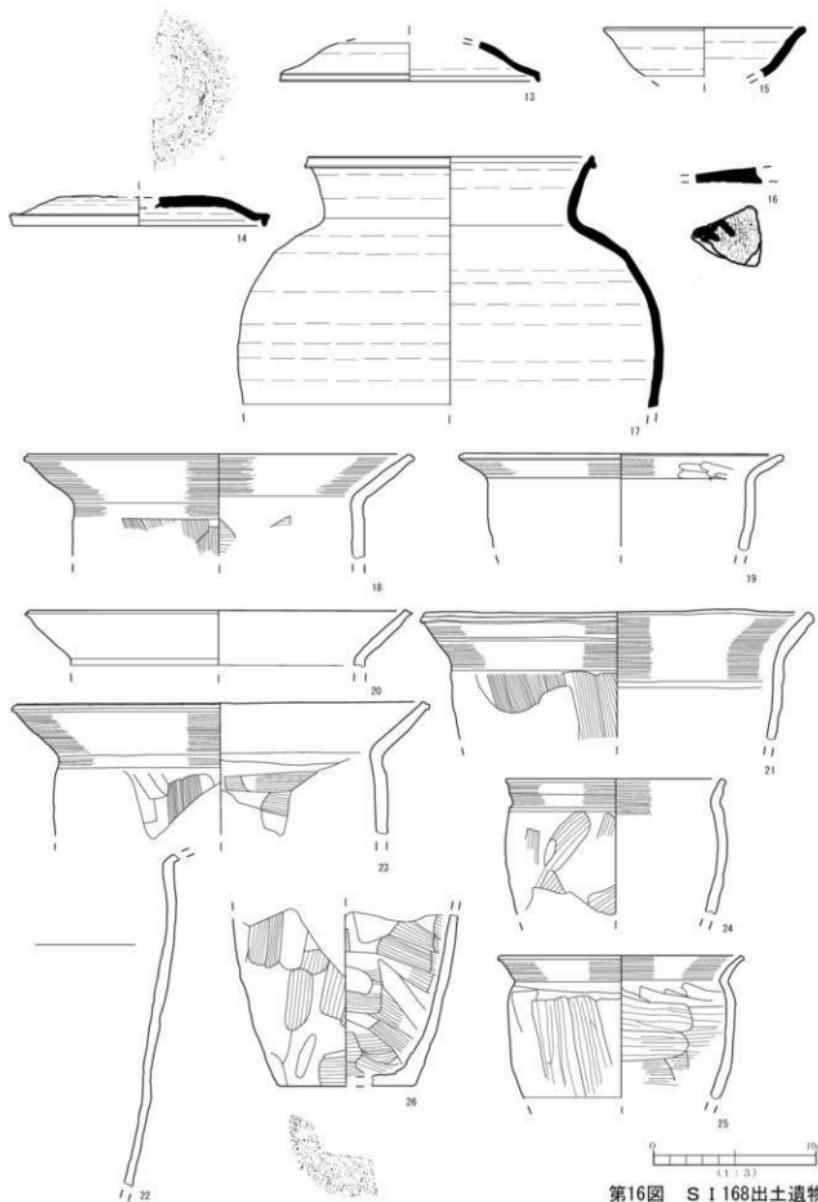
第13図 S I 37 出土遺物



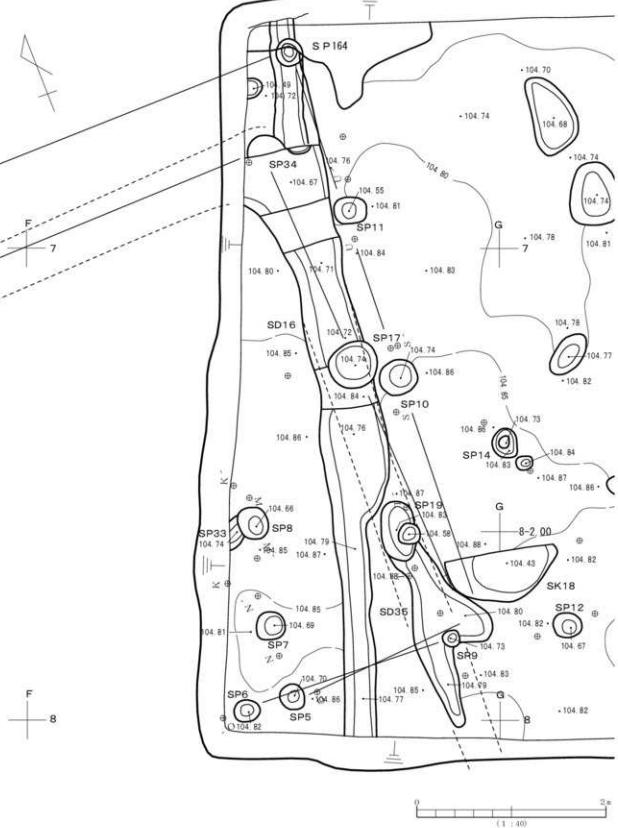
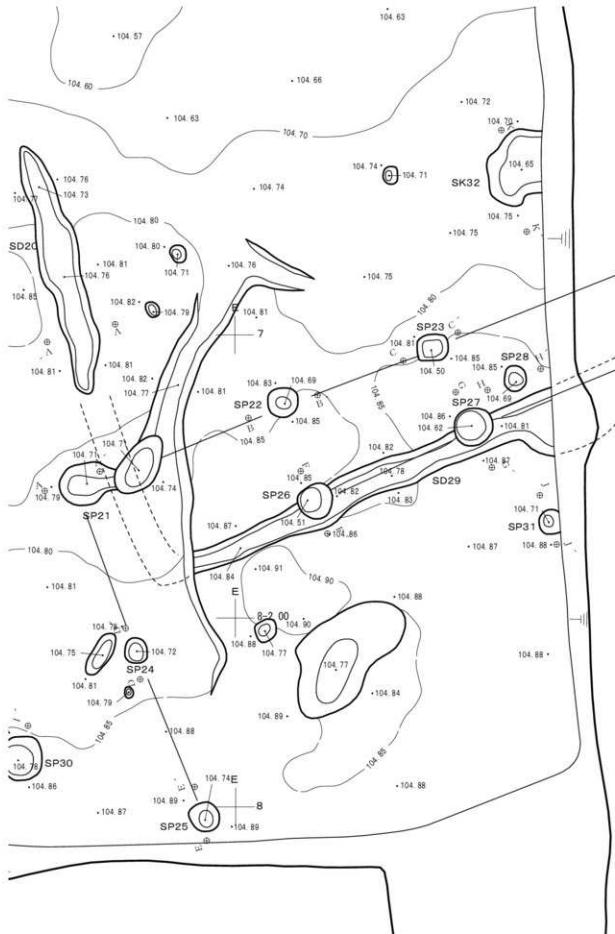
第14図 SI 80 平面図・断面図・出土遺物



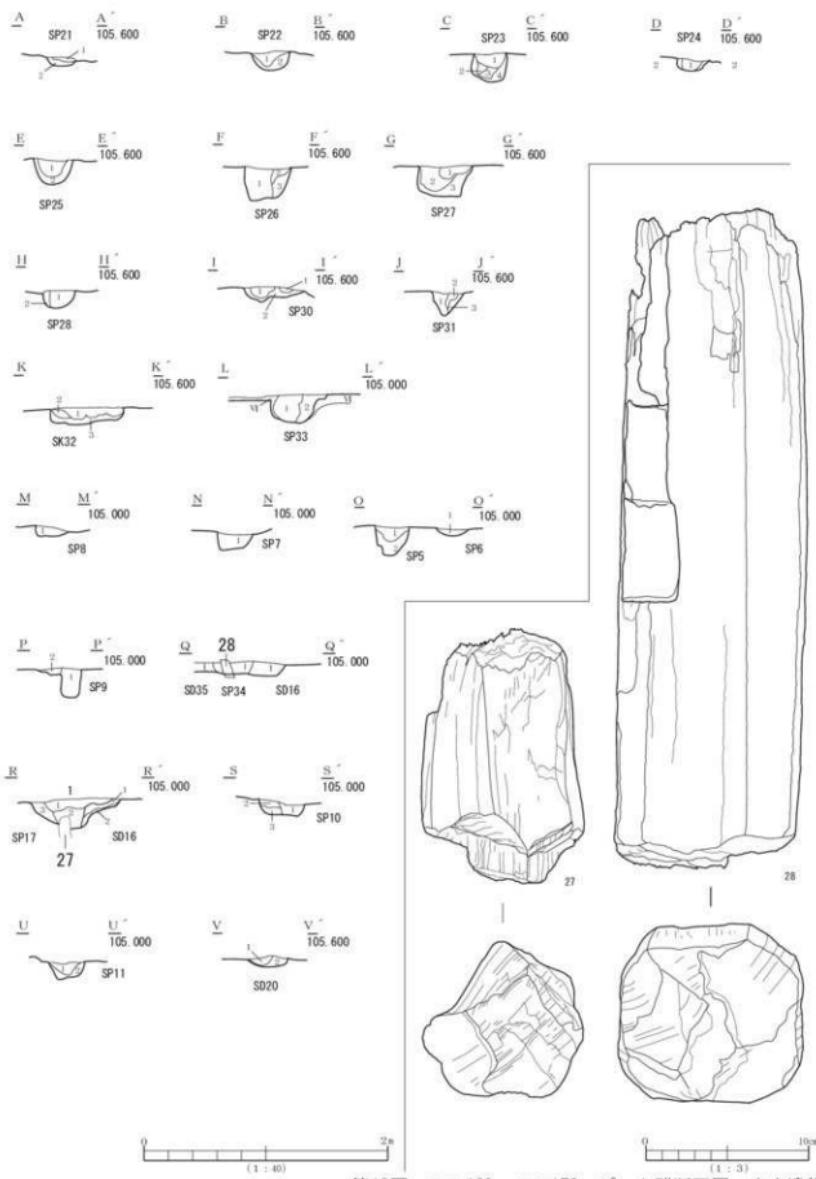
第15図 S I 168 平面図・断面図



第16図 S I 168出土遺物



第17図 SB169・SB170平面図



第18図 S B169・S B170 ピット群断面図・出土遺物

としないが、直角に折れて SD 29 に繋がる様相が推定される。遺物は出土していない。

SD 29 (第 17 図)

D・E-7 グリッドに所在。平面プランは直線であり、軸線方向は N-46°-E を測る。S P 26・S P 27 に切られる。遺物は出土していない。

SD 35 (第 17 図: 図版 11)

F-7 グリッドに所在。平面プランは直線であり、軸線方向は真北を測る。SD 16 を切る。掘り込みは浅い。調査区外のため判然としないが、直角に折れて SD 29 と繋がる様相が推定される。遺物は出土していない。

SD 113 (第 19 図: 図版 16・17)・SD 142 (第 19 図)

I-18 グリッドに所在。上幅は 35 cm を測る。平面プランは蛇行したカーブを描く。SD 142 と同一構造。SD 115 を切る。遺物は多く出土したが、大半が小破片であり、図化できたものはわずかである。I-19 グリッドの覆土上層 Vc 層中にて、逆位で突き刺さるように完形の須恵器平瓶 (104) が出土した。SD 113 からは須恵器蓋 (34)・坪 (33)、有台坪 (35) と赤焼土器無台坪 (32)、SD 142 からは須恵器甕 (39)、土師器甕底部 (40) が出土した。

SD 114 (第 19 図: 図版 16・17)

I-18 グリッドに所在。上幅は 25 cm を測る。平面プランは緩やかなカーブを描く。SD 115 に切られる。遺物は出土していない。

SD 115 (第 19 図)・SD 143 (第 19 図)・SD 145 (第 19 図: 図版 16・17)

I-18 グリッドに所在。上幅は 35 cm を測る。平面プランは緩やかなカーブを描く。SD 145・SD 143 と同一構造。SD 113 に切られ、SD 114 を切る。SD 115 からは赤焼土器坪 (36)、SD 143 からは須恵器無台坪 (41)・甕 (44)・土師器 (42・43・46)、SD 145 からは須恵器蓋 (47) が出土した。

SD 126 (第 19 図: 図版 15)

I-18 グリッドに所在。上幅は 50 cm を測り、深さはごく浅い。平面プランは直線であり、軸線方向は N-5°-E を測る。S P 132・S P 131・S P 141 に切られる。須恵器蓋 (38)・甕 (37) が出土した。

SD 171 (第 19 図)

I-20 グリッドに所在。上幅は 30 cm を測る。平面プランは蛇行する。深さは 10 cm 程度と浅い。遺物は出土していない。

SD 96 (第 24 図: 図版 14)

I-14・15 グリッドに所在。上幅は 60 cm を測る。深さは 5 cm 程度と浅い。平面プランは直線であり、軸線方向は N-88°-W を測る。遺物は出土していない。

SD 81 (第 24 図: 図版 4・5)

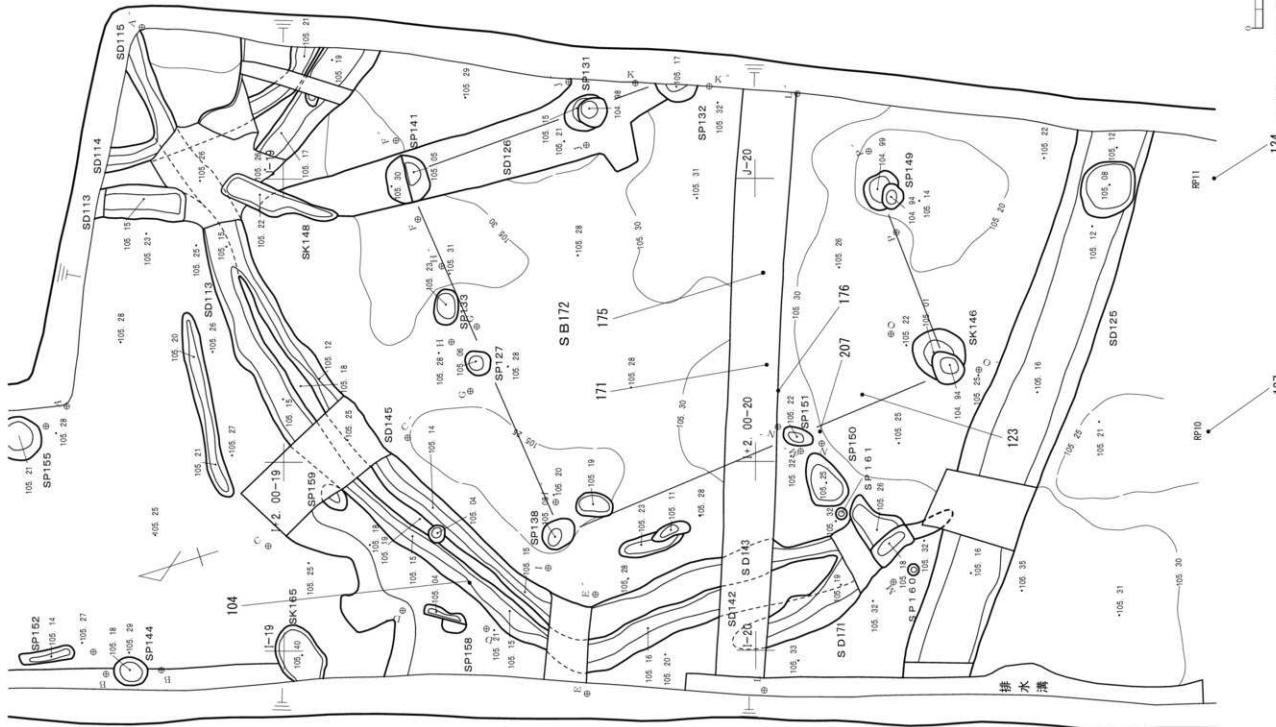
E-9 グリッドに所在。上幅は 50 cm を測る。深さは 15 cm を測る。平面プランは直線であり、軸線方向は N-24°-W を測る。S I 80 西側に位置する。遺物は出土していない。

SD 123 (第 30 図: 図版 19)

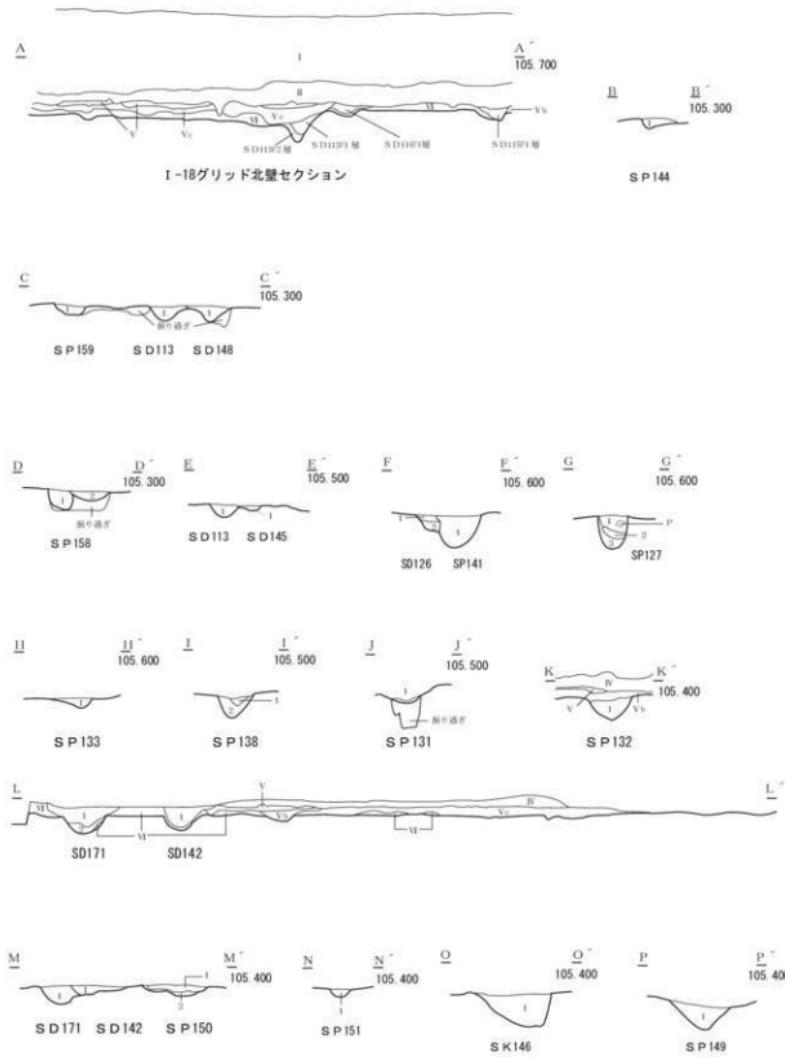
I-23～25 グリッドに所在。上幅は 40～50 cm を測る。平面プランは直線であり、軸線方向は N-24°-W を測り、I-25 グリッドで南西にクランクして曲がる。遺物は出土していない。

SD 1・SD 125 (第 31 図: 図版 15)

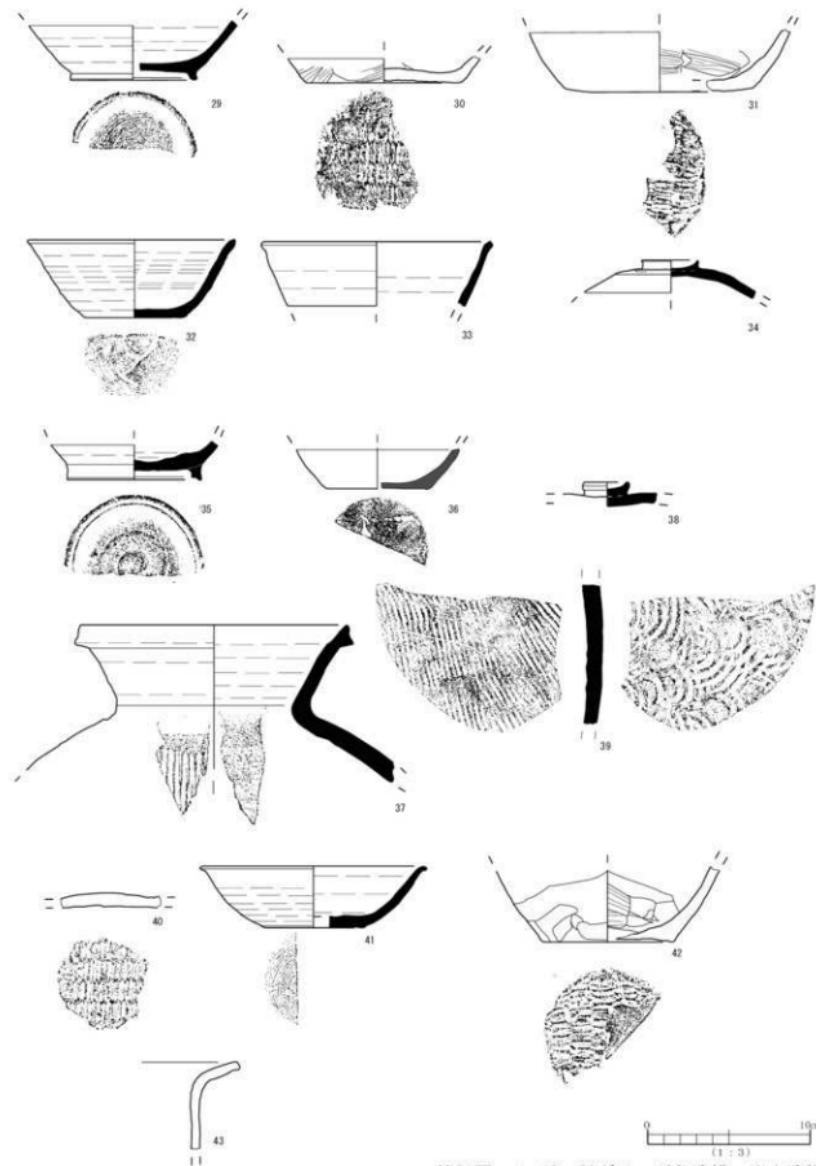
F-19～H-21 グリッドに所在。上幅は 50 cm を測る。深さは 20 cm を測る。平面プランは直線であり、軸線方向は N-52°-W を測る。SD 1・SD 125 は調査区境界で分断されているが、規模・軸線方向から判断して、同一の溝と考える。西側では VI 層上面で確認されたが、東側では Vc 層上面で確認されたため、他の遺構群より新しい、Vc 層堆積後の遺構と判断される。SD 1 から須恵器甕 (63)・蓋 (62)、SD 125 から須恵器有台坪 (64) 甕 (65～69)、土師器甕底部 (70) が出土した。



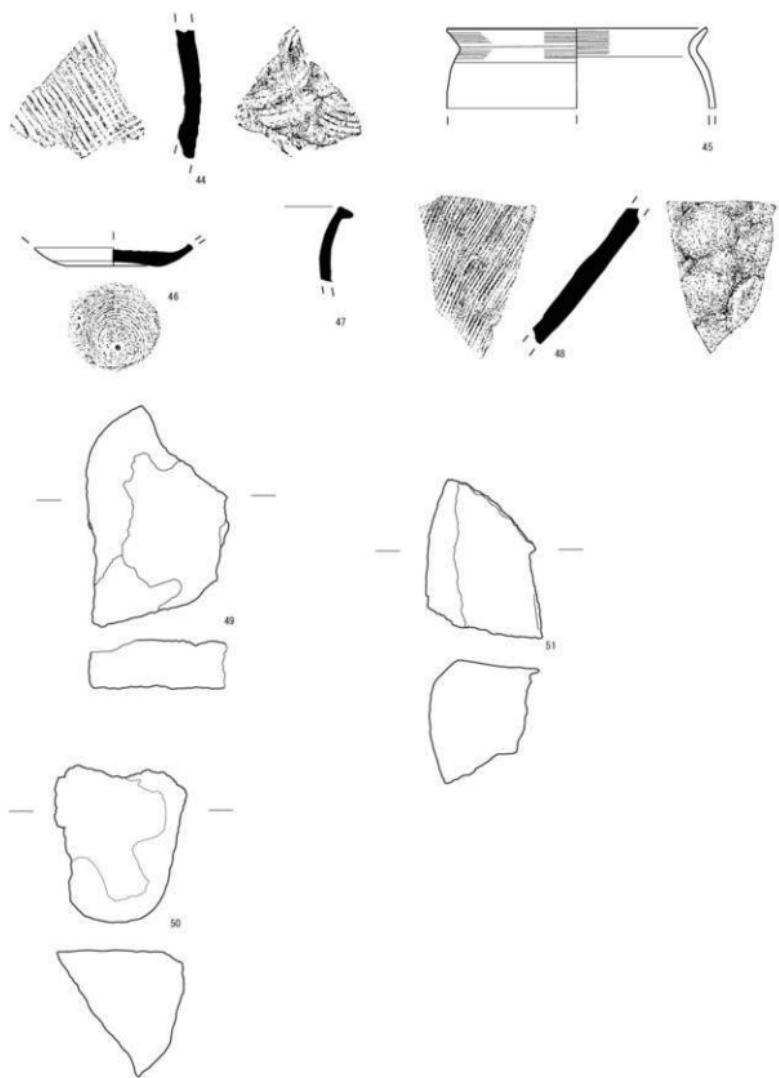
第19図 1-18~20グリットド遭構群 平面図



第20図 1-18~20グリッド 各構造断面図



第21図 I-18~20グリッド各遺構 出土遺物



第22図 I-18~20グリッド出土遺物(2)・SD36出土遺物

SD 36 (第33図: 図版18)

F-10～G-11グリッドに所在。上幅は40cmを測る。深さは10cmを測る。平面プランは直線であり、軸線方向はN-40°-Wを測る。S-I-37との切り合はない。SD 40と軸線方向を同じくする。南側をSG 41に切られる。珠洲と判断される須恵器系陶器壺破片(48)・被熟磧(49～51)が出土した。

SD 39 (第33図)

F-12グリッドに所在。上幅は約60cmを測る。平面プランは直線であり、軸線方向はN-9°-Wを測る。遺物は出土していない。掘り込みの深さは浅く、不整円形の土坑が重なり合うような凹凸の目立つ底面の状況であった。

SD 40 (第33図)

G-12グリッドに所在。平面プランは直線であり、軸線方向はN-34°-Wを測る。SD 36と軸線方向を同じくする。北側をSG 41に切られる。遺物は出土していない。

6. 川跡

SG 41 (第34～36図: 図版18)

調査区の中央部を北西から南東に継貫する。平成17年度調査区(植松2006)で確認されたSX 6と同一の遺構と判断される。V層と酷似する粘性の強い黒色シルト層の堆積する範囲を河川跡の覆土範囲と認識した。その下層、V-b層・Vc層からも遺物が巻き込まれるようにして出土した。F 1層を掘り込む稻杭跡の黄褐色粗砂層をF 2層として認識した。遺構検出面全体を覆うV層自体がSG 41のF 1層と酷似し、SG 41河川が氾濫して本次調査区全体が覆われたものと考えられる。

F 1層を精査したところ、地山となるVI層を小穴状に掘り込んで堆積する様相が確認された。ヨシなどの植物が繁茂し、その根の痕ではないかと推定される。

出土遺物は、F 1層から須恵器蓋(72)・無台坏(73～79)・有台坏(80)・甕(81～83)・壺(84)、土師器甕(85～91)、赤焼土器無台坏(94～97)、白磁端反碗(98)、紙石(99)、外面にケズリ、内面にミガキを施す土師器坏(100)が出土した。F 2層からは須恵器無台坏(101)のみ出土した。

年代については、遺物の帰属年代から推定して、概ね9世紀前半を中心とし、下限は白磁端反碗(98)や珠洲と判断される須恵器系陶器(154～156)が、調査区内東側のG-14グリッドV層からかわらけ(195・196)が出土しているため、12世紀後半にはその機能を失い、堆積したものと推定される。須恵器系陶器(60)の出土したSD 36を切るため、SG 41の年代自体が12世紀代以降に降る可能性もある。

なお、I-12グリッドで検出されたSG 41底面から、及びG-12グリッドで検出された溝跡SD 36の遺構底面(VI層直上)でバミス状の黄白色堆積物が確認された。サンプルとして採取し、採取箇所はI+2.00-13グリッド杭南側及びH-2.00-11グリッド杭南側である。予算上の制約もあり、分析等は実施していない。

7. 遺構外出土の遺物

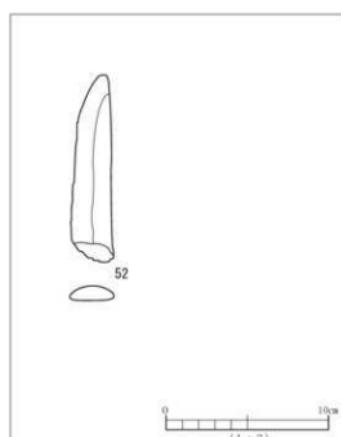
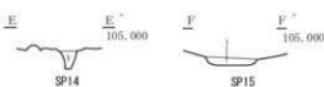
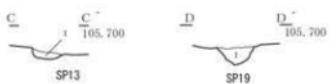
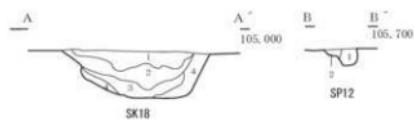
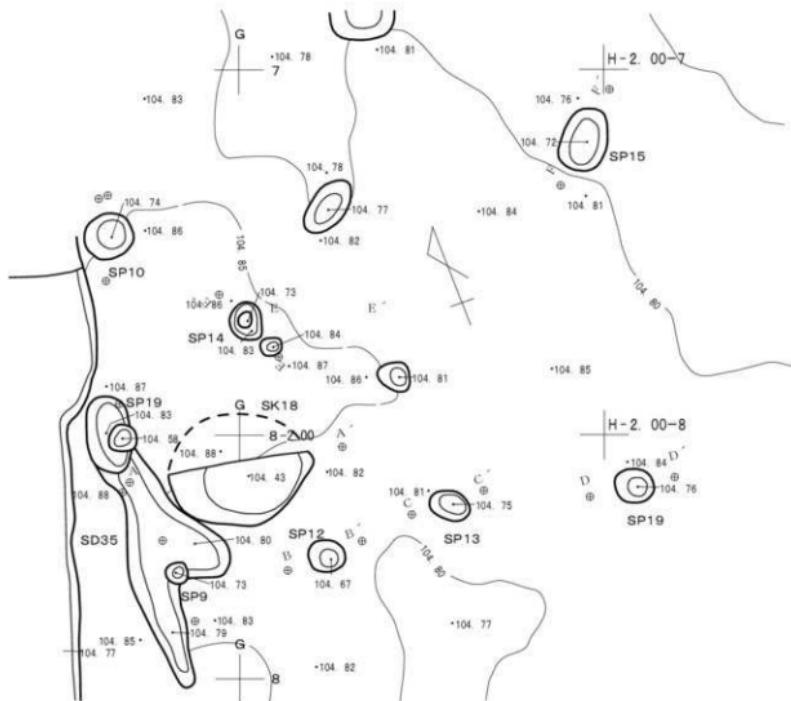
遺構外出土の遺物について第37～43図に列挙した。今回調査区の出土遺物の大半を占める。

遺構検出面直上の包含層であるV層から最も多量に遺物が出土した(第38～43図)。

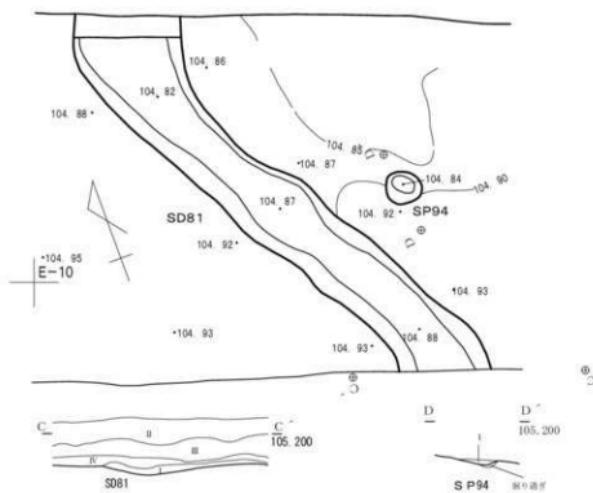
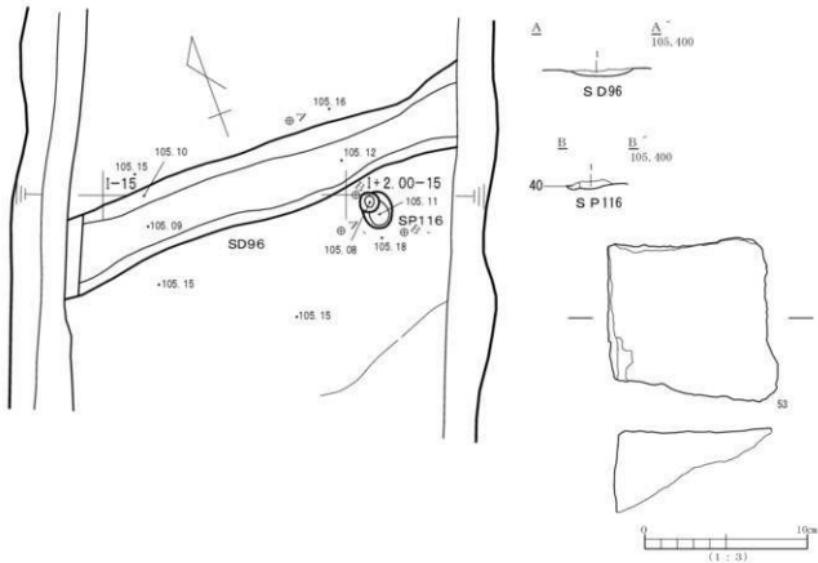
須恵器の無台坏・有台坏・皿・耳付坏(136)・甕・壺、土師器の甕、赤焼土器の無台坏・有台坏、かわらけ、珠洲と考えられる須恵器系陶器甕が出土した。

以下、特徴的な遺物について列挙する。I-19グリッドのVc層からは、須恵器の平瓶(104)が出土した(第19図)。SD 113の覆土上層で逆位の状態で検出された。形状等から判断して、坏身底部の切り離しはヘラ削りで、ナデが施されている。注口の口縁部に打ち欠いた痕跡が確認される。

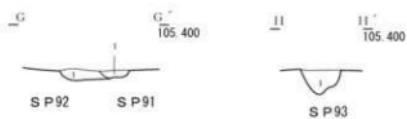
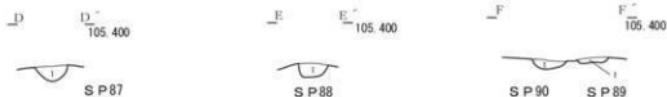
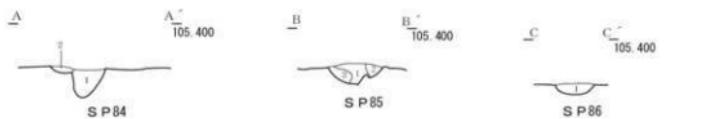
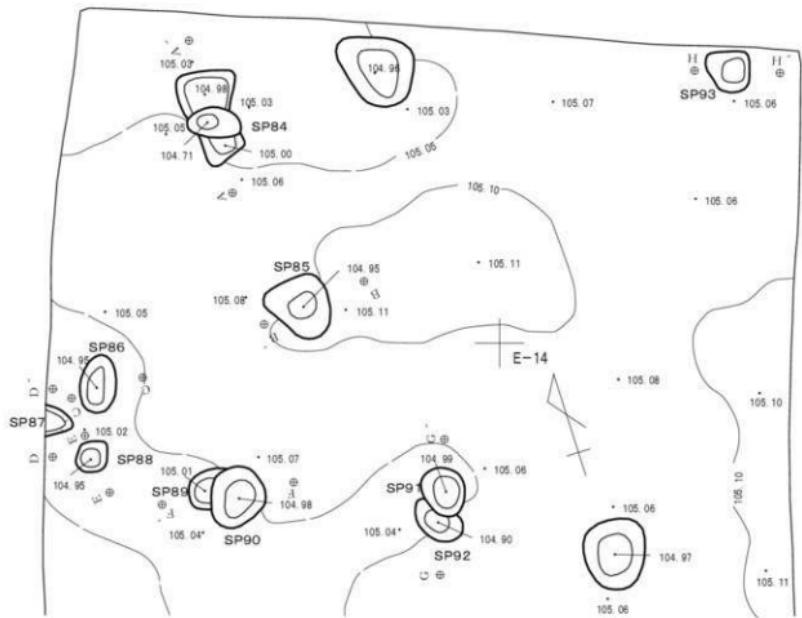
平瓶について、県内からは南陽市蒲生田古墳群・高畠町羽山古墳・酒田市樋ノ口の3例の出土事例があるが、いずれとも形状が異なり、具体的な年代観は不明である。(104)は坏身部分の胎土や法量および底部の調整から推定すると、9世紀初頭の無台坏と形状が類似する。ただし、平瓶そのものの県内出土の類例が少ないので、概要を述べるに留め



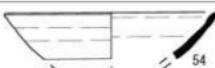
第23図 SK18・SP12・SP13・SP14・SP15・SP19 平面図・断面図・出土遺物



第24図 SP116・SD96・SP94・SD81 平面図・断面図・出土遺物

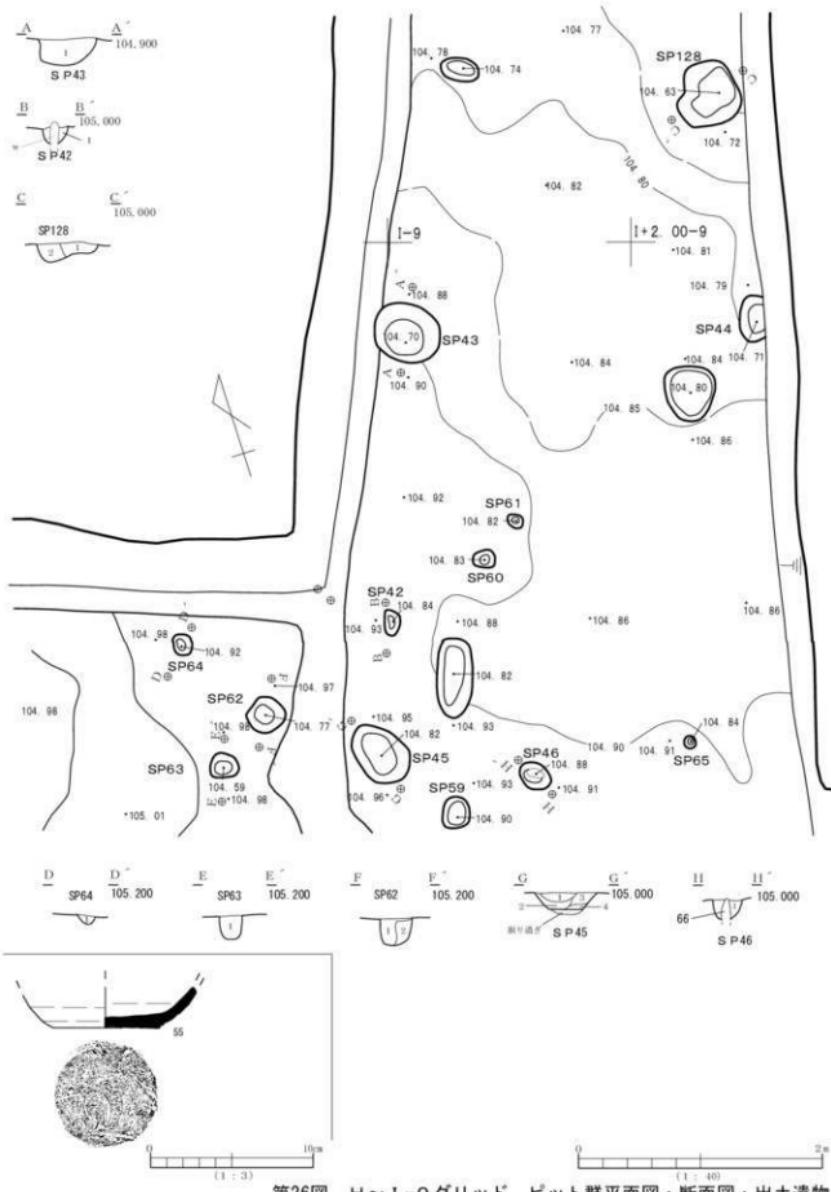


0 10m
(1 : 40)



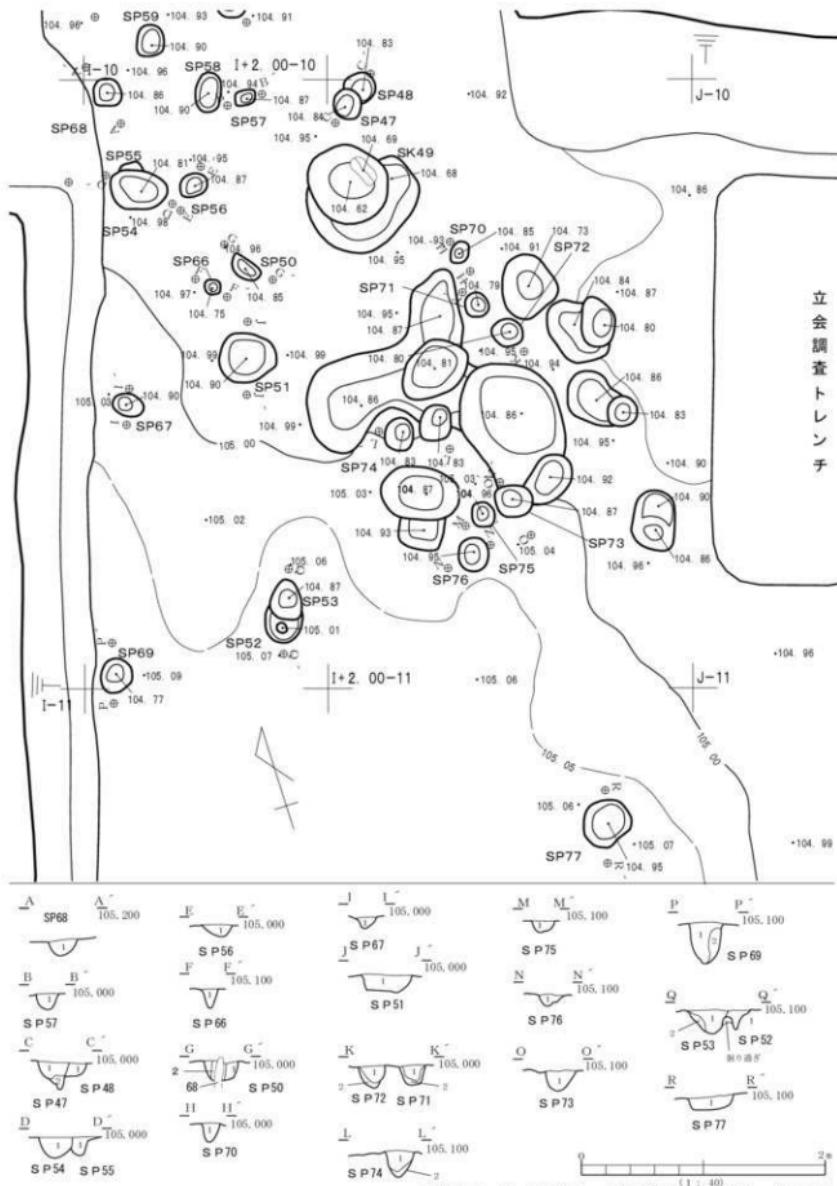
0 10m
(1 : 3)

第25図 D-13~14グリッド 遺構群 平面図・断面図・出土遺物

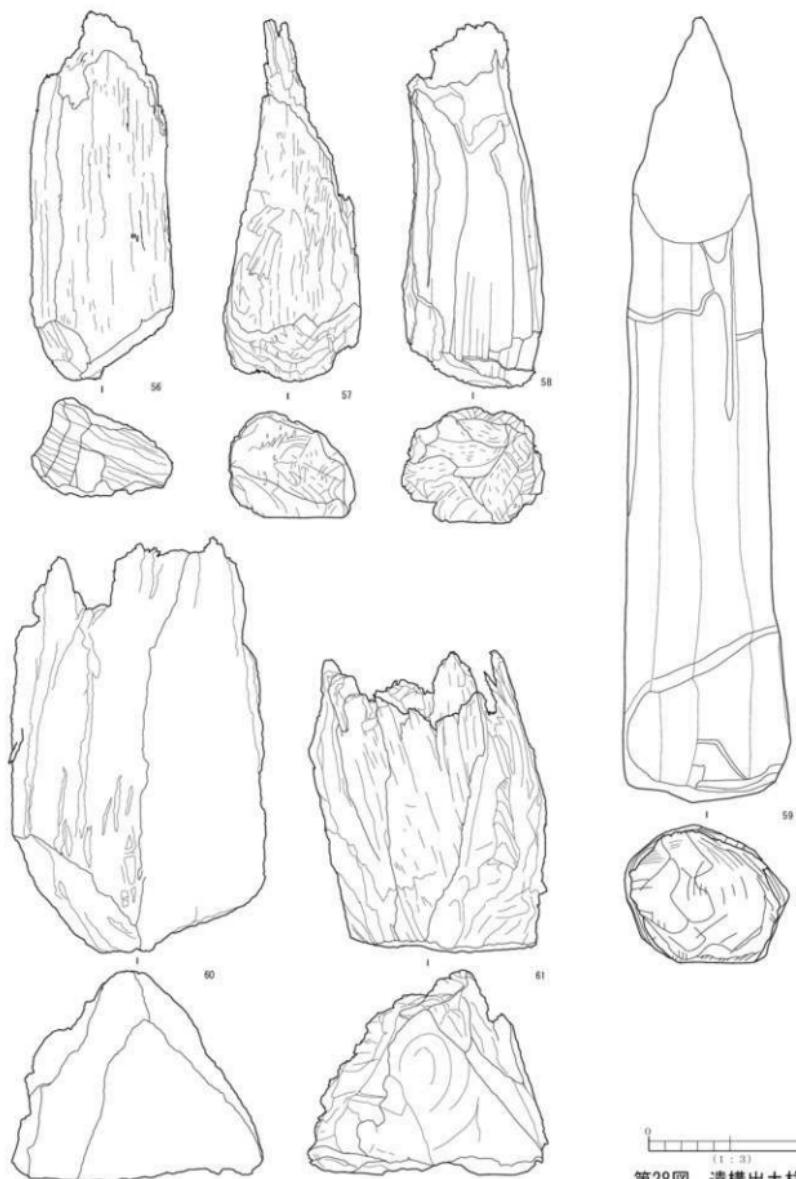


第26図 H~I-9グリッド ピット群平面図・断面図・出土遺物

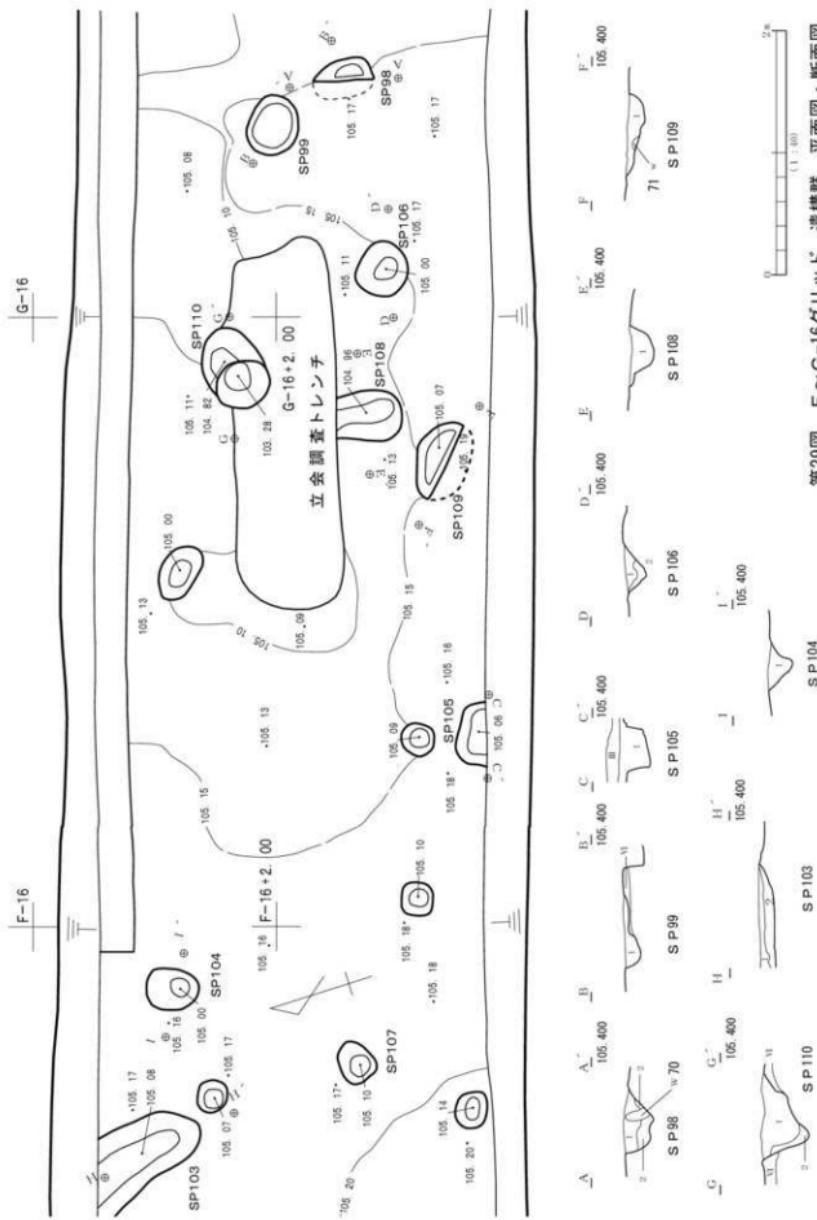
立会調査トレーニチ



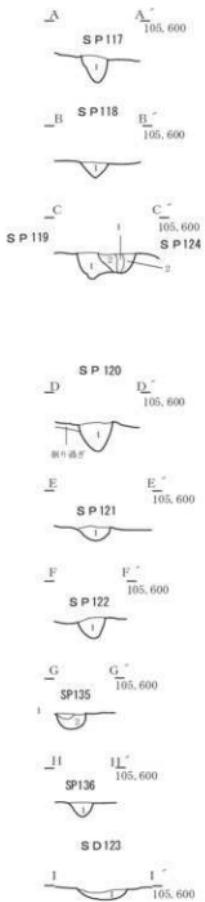
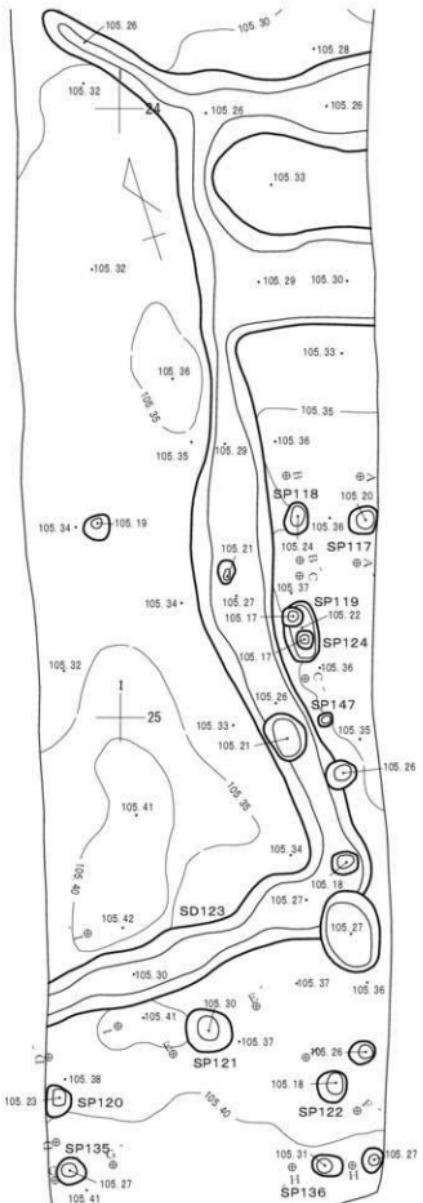
第27図 H-10グリッド構造平面図・断面図



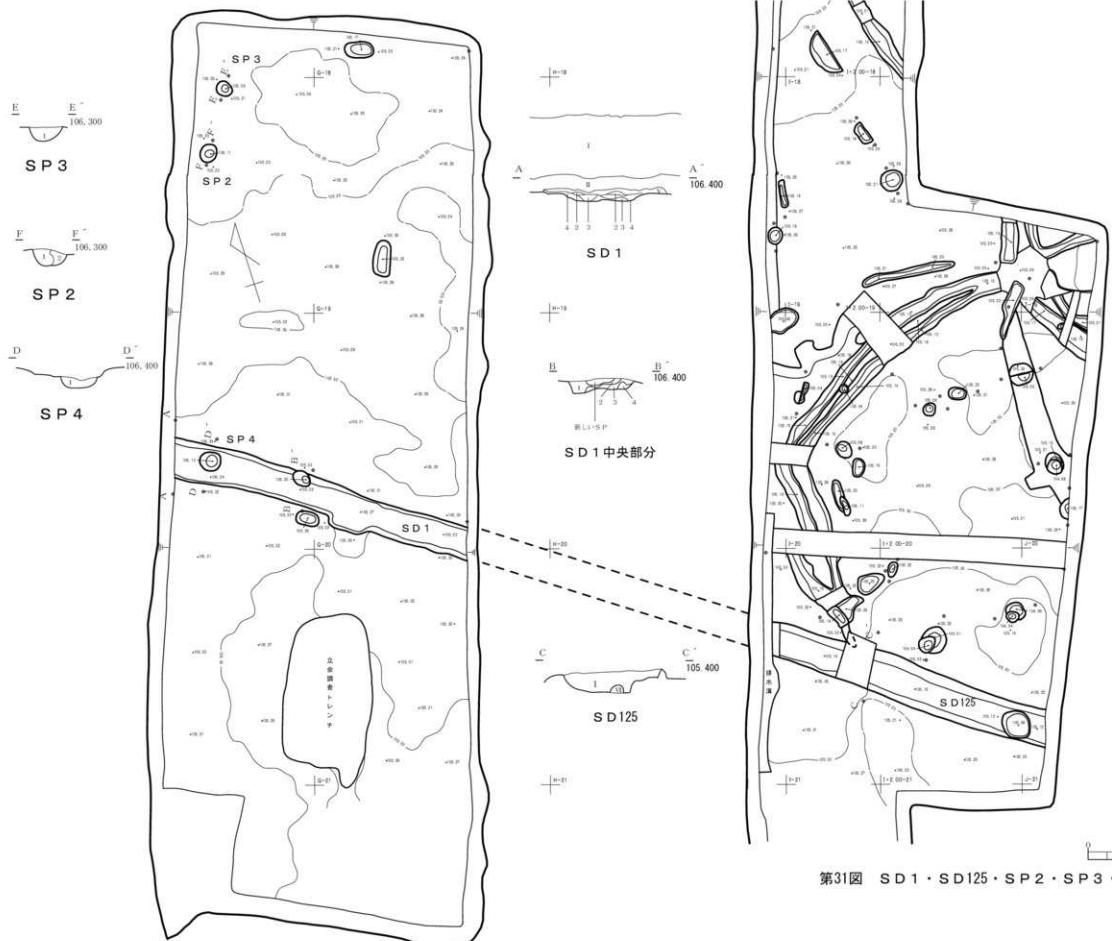
第28図 遺構出土柱根



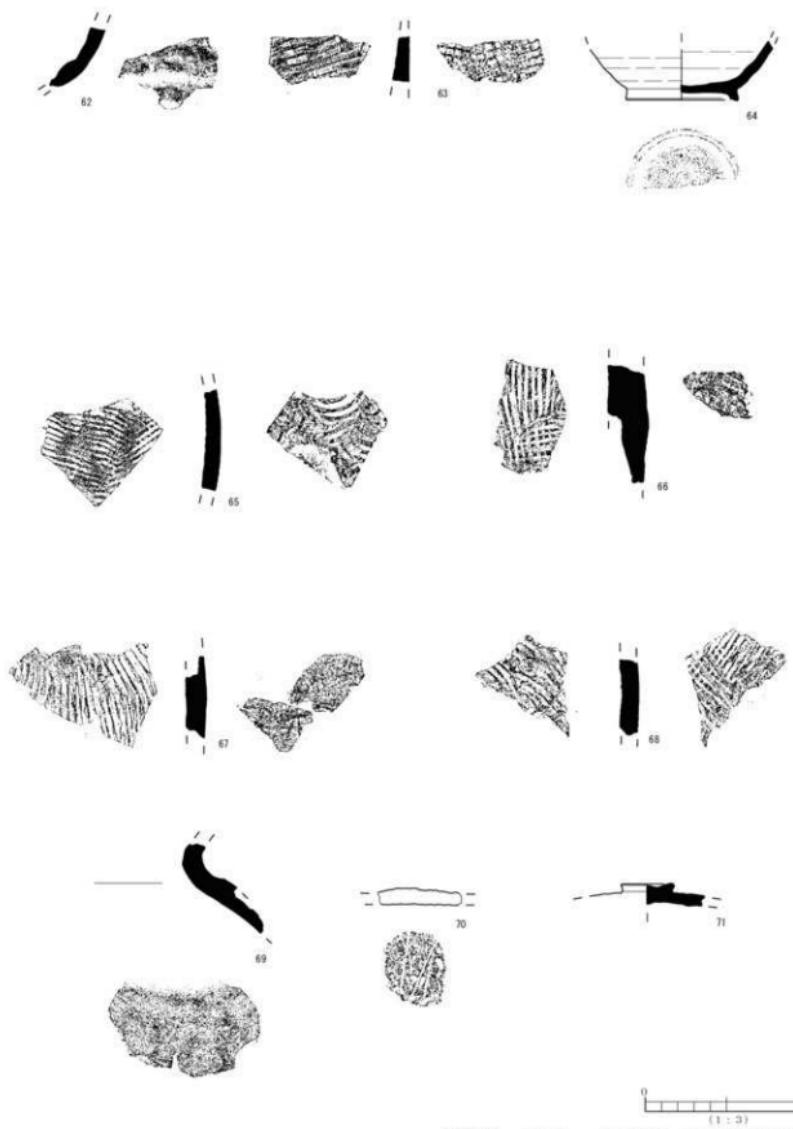
第29図 F～G-16グリッド 遺構群 平面図・断面図



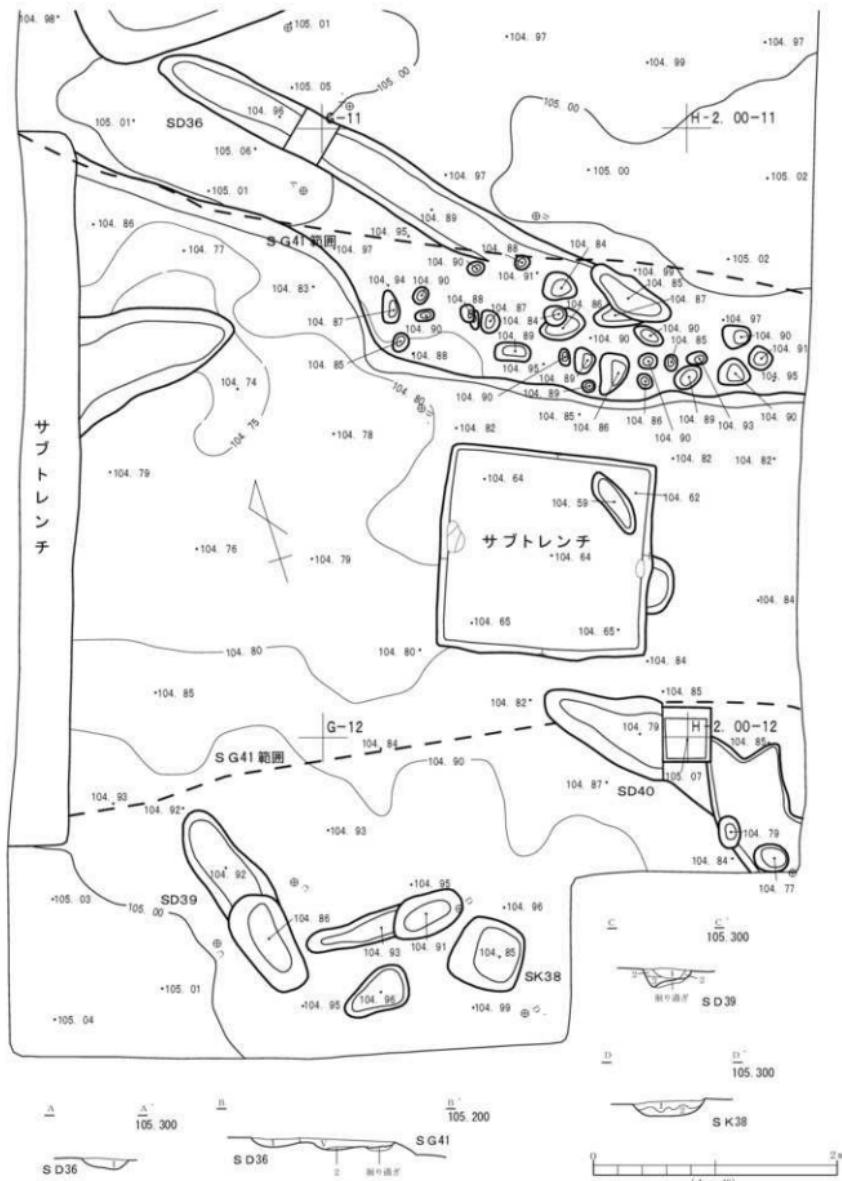
第30図 I-22~25グリッド遺構群
平面図・断面図



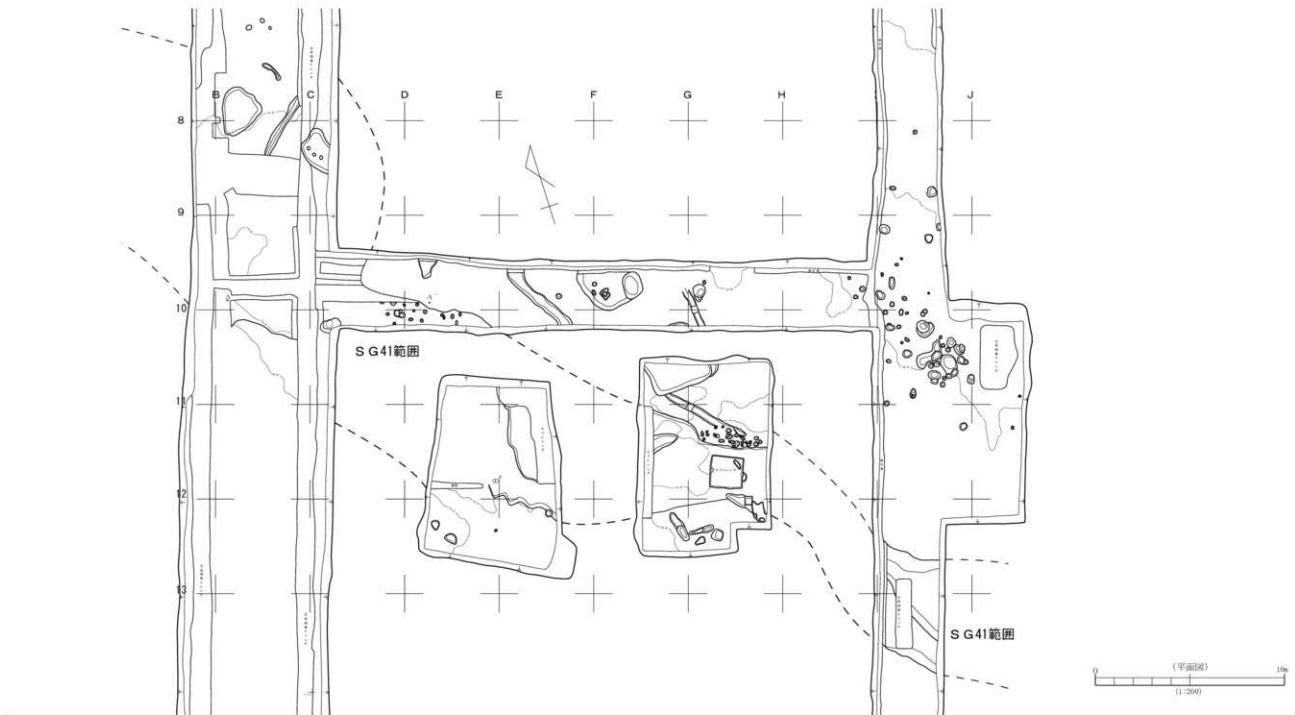
第31図 SD 1・SD 125・SP 2・SP 3・SP 4 平面図・断面図



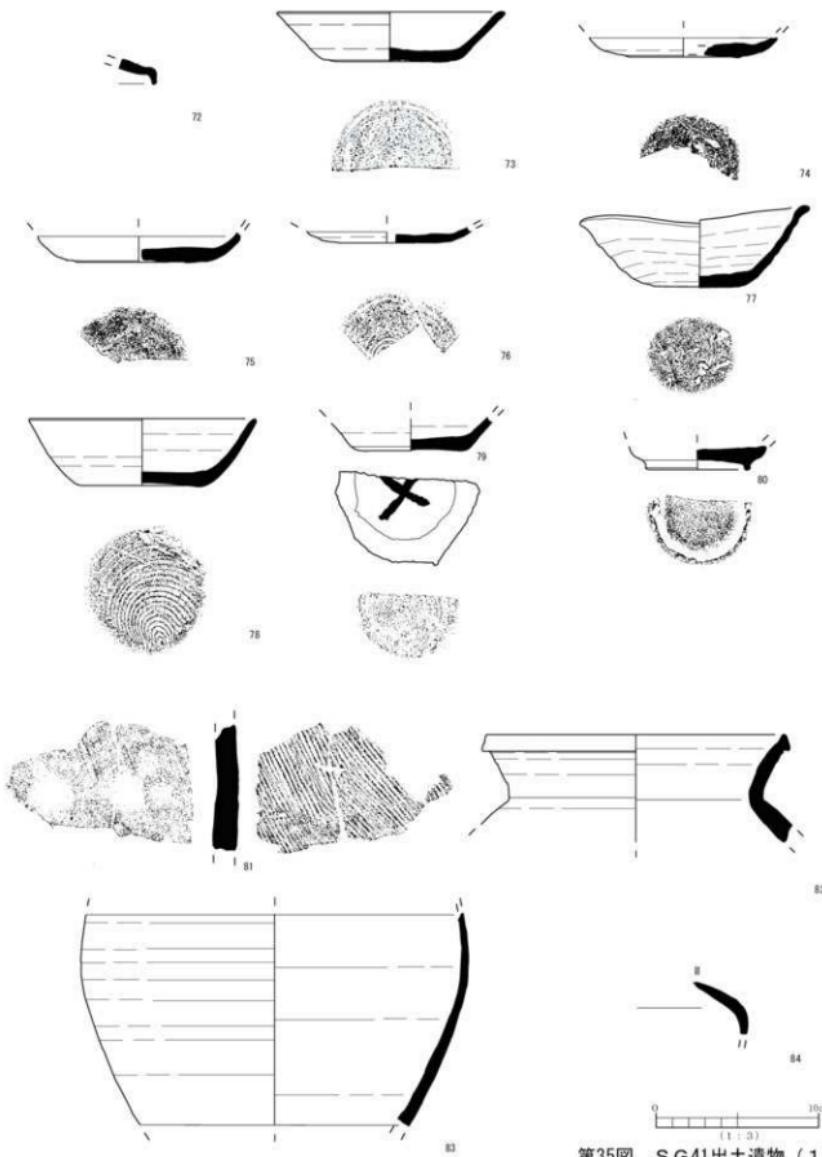
第32図 SD 1・SD 125・SP 109出土遺物



第33図 S K38・S D36・S D39・S D40 平面図・断面図



第34図 SG41平面図・断面図



第35図 SG 41出土遺物 (1)